

第2章 竹田市の維持向上すべき歴史的風致

(1) 城下町の夏越祭にみる歴史的風致

竹田市街地は、文禄3年（1594）に豊臣秀吉の命により、播州三木（兵庫県三木市）から竹田に入部した岡藩初代藩主中川秀成（在位 1593～1612）により造られた城下である。城下町の建設は、中川氏の入部当初から始まる。当時の城下一帯は稲葉川右岸に広がる沼地で水田もなく民家が少々みられる程度であったと伝えられ、城下建設のため沼地を埋め立て、玉来（城下町の南西約2km）と十川（中川氏入部以前の城下町）から町家に移転させ、碁盤目状に区画された町割りが造られた。その後、寛文4年（1664）に古町が形成され、江戸時代から現在に至るまで、この地域の経済活動の中心として発展した。

城下町と密接な関係のある史跡岡城跡は、城下の東側に500mほど離れた阿蘇溶結凝灰岩の台地上に築かれ、城と城下は丘陵と谷により遮断されている。岡城の築城は、文治元年（1185）に源平合戦の時に活躍した緒方三郎惟栄が源頼朝に追われ九州へ逃れようとした源義経を迎えるために設けたとされ、建武年中（1334-1337）に豊後国守護職大友氏の支族である志賀貞朝が拡大したと伝えられているがこれを裏付ける正確な資料はなく、今日の史跡岡城跡の前身となる城は、応安2年（1369）頃以降に志賀氏の居城として築城されたと考えられている。



岡城正保絵図（正保年間：1644～1648）

岡城は城の北側を稲葉川、南側を白滝川が流れ城の東側で両河川が合流し、河川から城の主郭部までは標高差は 100m ほどの断崖である天然の要害に築かれている。岡城の堅固さは、天正 14 年（1586）に始まった薩摩の島津氏と大友氏の戦い「豊薩戦争」において岡城攻略を行った島津勢を当時の岡城主志賀親次が撃破したことからも実証されている。現存する岡城跡は、中世の山城であった志賀氏の居城段階の岡城を岡藩初代藩主中川秀成が藩領統治の拠点とし大々的に改修普請を行い、本丸・二の丸・三の丸からなる城の主郭部、城郭の西側に築かれた西の丸及び家老屋敷、東側に藩主の祖先を祀る廟所のほか、大手門・近戸門・下原門・清水門の 4 つの門が設けられるなど、中川氏入部から明治維新後に取り壊されるまで、拡張・改修を行い壮大な石垣が築かれた近世城郭として形が整えられた。

城下は、武士の居住域である武家屋敷群、商人・職人の居住域である町家群、寺院が集中する区域から構成されており、武家屋敷群（向町・殿町・代官町・浦町）は城下を取り囲むように配置され、西側の一角に寺院群（寺町）が配置されている。これらの武家屋敷群と寺院群に囲まれた中央に町家群（本町・上町・新町・田町・府内町・古町）が配置され、この町割りや呼称は現在まで大きな変化もなく残されている。



史跡岡城跡全景



史跡岡城跡大手口



史跡岡城跡三の丸付近



岡城古写真（明治初期）



岡城下中絵図(天明7年：1787)



現在の城下町

指定文化財は、市内最古の木造建築物である重要文化財願成院本堂(愛染堂)。田能村竹田(豊後南画の祖)の生家である史跡旧竹田荘。岡藩主ゆかりの寺である西光寺境内(県指定史跡)は、安政5年(1858)建築の木造重層入母屋造、瓦棒形銅板葺の本堂(市指定有形文化財)、延宝8年(1680)の建築とされる木造切妻造、瓦葺の禅宗様の四脚門である山門(市指定有形文化財)、元禄4年(1691)建築の桁行梁間共に一間の木造入母屋造、袴腰付、本瓦葺の鐘楼(市指定有形文化財)及び中川家婦女子の墓から構成される。



西光寺本堂

岡藩営の宿泊所として文化3年(1806)に建築された御客屋敷(市指定史跡)は、木造1階建棧瓦葺で、北側は入母屋造、南側は切断されているため切妻造である。正面の桁行7間、梁行4間半で、北面の西端に半間下屋を張り出し、北西隅に便所棟が附属している。



御客屋敷

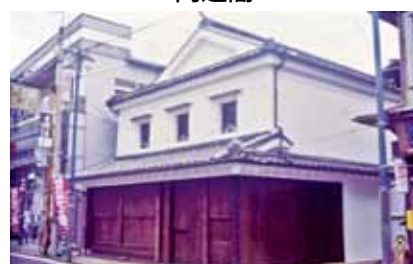
中国風楼閣を模し豊後国志の編纂が行われた円通閣(市指定有形文化財)は、寛政11年(1799)の棟札がある木造長屋門形式に禅宗様の門扉を配した建物で桁行10間、梁行2間を測る。



円通閣

また、登録有形文化財は塩屋土蔵、佐藤家住宅、吉川家住宅、竹田市公民館竹田分館(旧一味楼)、旧竹屋書店、塩屋旧大蔵が城下町内に存在し、江戸時代から昭和初期の古い建造物も数多く残され、城下町の風情を醸し出している。

江戸期の商家建築の好事例である塩屋土蔵は主屋・中蔵・古蔵から構成され、主屋は棟札から元治2年(1865)の建築とわかり、構造は土蔵造棧瓦葺の2階建の妻入の建物で、屋根構造は正面入母屋造、背面切妻造となっている。1階の下屋庇は側面にも廻りこみ、要所に水切庇付の小窓を配し、軒裏まで漆喰塗とした重厚な造りとなっている。中蔵は、主屋の後方に建つ土蔵造の建物で、建築年代は江戸時代末、屋根は切妻造で棧瓦葺、平入の2階建土蔵であり、外壁は軒裏まで漆喰塗で2階の小窓には鉄格子がある。内部は桁行中央の漆喰壁で2分され、主屋側が座敷、残りが倉庫となっており、主屋と連続して商家の佇まいを構成している。古蔵は中蔵後方に建つ土蔵造の建物で、建築年



塩屋土蔵主屋



佐藤家住宅主屋

主屋と連続して商家の佇まいを構成している。古蔵は中蔵後方に建つ土蔵造の建物で、建築年

代は江戸時代末、桁行4間、梁間3間の切妻造棧瓦葺の平入の2階建土蔵。外壁は漆喰塗で、軒裏から破風まで塗籠める。主屋側の1階戸口は漆喰扉を吊るが、周囲を鳥居型に縁取る。

佐藤家住宅は、主屋・旧店舗兼主屋・旧味噌蔵・土蔵から構成され、主屋は明治12年に建築された木造2階建、切妻造棧瓦葺の建物で、桁行9間、梁間5間の規模を測る。2階正面を漆喰塗とする規模の大きな町家である。旧店舗兼主屋は、明治12年に建築された桁行5間半、梁間5間半の木造2階建、切妻造棧瓦葺の建物。旧味噌蔵は、明治12年に建築された桁行3間半、梁間3間の木造2階建、切妻造棧瓦葺の建物。土蔵は、明治12年頃に建築された桁行3間、梁間2間半の土蔵造2階建、切妻造棧瓦葺の壁面を漆喰塗とする建物。



吉川家住宅倉庫一

吉川家住宅は、主屋・土蔵・倉庫一・倉庫二・倉庫三から構成され、主屋は大正10年（1921）に建築された、間口5間半の木造2階建、入母屋造棧瓦葺の建物で、1階に広い土間、2階に大広間を備える店舗兼住宅である。土蔵は、明治11年（1878）に建築された桁行3間半、梁間3間の土蔵造2階建、切妻造棧瓦葺の建物で、壁面を漆喰塗とする。倉庫一は、明治11年に建築された桁行8間、梁間4間の土蔵造2階建、切妻造棧瓦葺の建物で、かつては「酒造所」の酒蔵として使用されていた大規模な土蔵である。倉庫二は、倉庫一の背後に建つ木造2階建、棧瓦葺の建物で、内部は米を蒸すための「釜場」や「洗米所」、酒造り職人の「休憩所」として使用されていた。倉庫三は、木造2階建、切妻造棧瓦葺の建物で、「室（麴室）」と使用されていた。竹田市公民館竹田分館旧一味楼は、大正2年頃に料亭一味楼として建築された入母屋造棧瓦葺、木造2階建の建物で、南寄りの西面に玄関、東面に倉庫が付設し、1階は南北に座敷が並び、2階はステージを持つ大広間となっている。9間にも及ぶ杉丸太や桐などの良材を贅沢に使う料亭建築である。



竹田市公民館竹田分館旧一味楼

旧竹屋書店は、店舗兼主屋と土蔵から構成され、店舗兼主屋は明治32年に建築された、桁行6間、梁行7間の木造2階建、切妻造棧瓦葺の建物で、西正面に下屋を付ける。正面1階はガラス戸を立て込み開放的な造りであるが、他は漆



旧竹屋書店店舗兼主屋

喰仕上げの大壁となっている。土蔵は、明治中期建築の桁行3間、梁間2間の土蔵造平屋建、切妻造棧瓦葺の建物で、漆喰仕上げで鉢巻をまわし、北面に出入り口を穿つ。

塩屋旧大蔵は、江戸末期の建築の土蔵造2階建、桁行が東西で少し異なる台形平面になる土蔵造2階建、切妻造棧瓦葺の建物で、壁は大壁とし漆喰で仕上げられている。

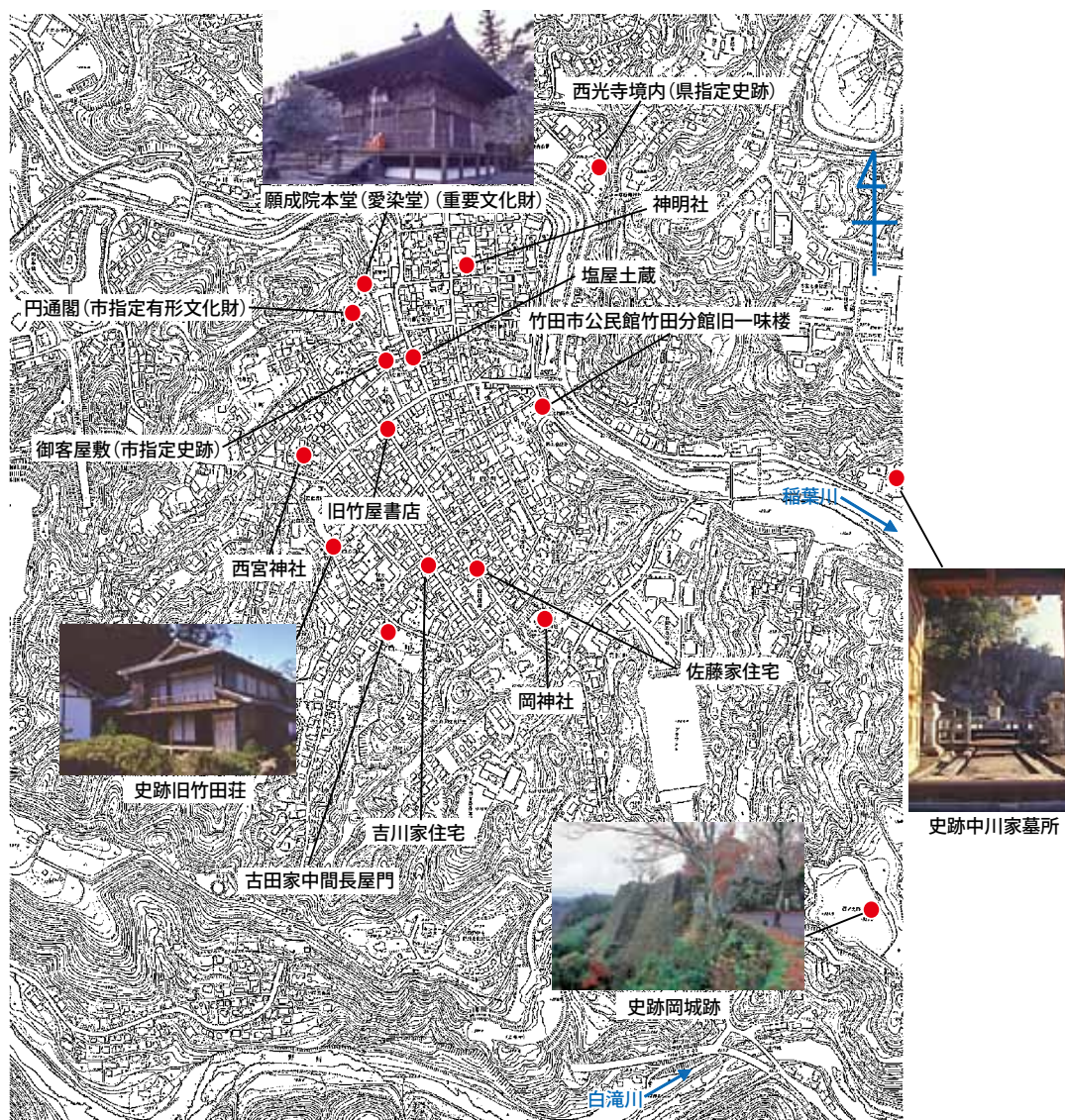
この他に、弘化4年（1847）建築の桁行10間半梁行2間、切妻造棧瓦葺の武家屋敷の長屋門である古田家中間長屋門がある。



塩屋旧大蔵



古田家中間長屋門



【文化財の分布図】

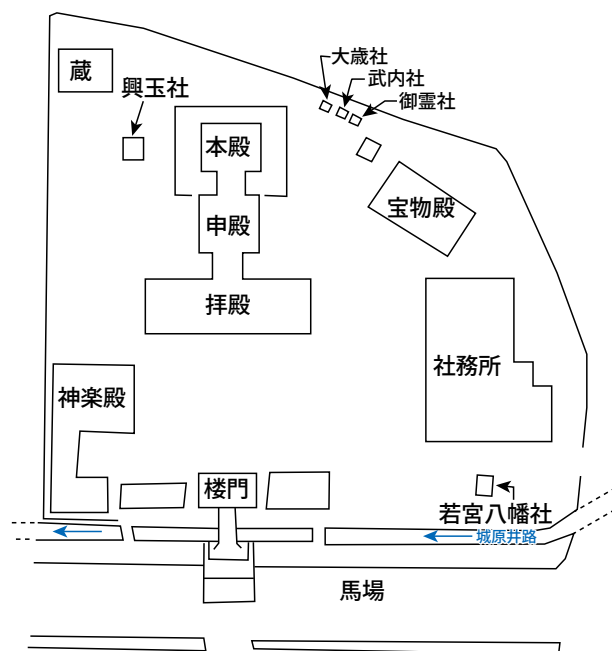
岡城下町で行われる主要な祭りである夏越祭は、城原八幡社の神輿が城下町（竹田町）にある3社（西宮神社・岡神社・神明社）へ御神幸を行う祭りで「城原様のオサガリ」と城下に住む人々から呼ばれ親しまれている。

城原八幡社は、竹田市大字城原に所在する神社で、その由緒は「日本書紀」によると、景行天皇12年の熊襲征討の折、土蜘蛛の抵抗が強く一時城原に引き返し軍を整えたとあり、その行宮跡が城原八幡社上松原社地であるとされ、応神天皇2年（271）に行宮跡に1祠を造営して景行天皇の御神霊を斎奉ったことに始まるとされる。天安2年（858）に国司豊後守石川朝臣宗継が殿宇を造営し八幡神を相殿に配祀させた。以後城原八幡社と称するようになったと伝えられ、建久7年（1196）大友能直が城原八幡社を崇敬し豊後八幡7社の一つとされ、大友氏からの庇護を受ける。天正14年（1586）薩摩島津軍の豊後侵入の際、宮司日野品秀は八幡の神霊を産山村（熊本県産山村）の隠川へ奉安し、文禄3年（1594）中川秀成の豊後岡入部の時、神霊を産山から竹田町の勝山に遷座され岡の総鎮守とされ、勝山を八幡山と呼ぶようになった。慶長元年（1596）に神霊は八幡山から元の城原の地に遷座された。



城原八幡社拝殿

現在残される城原八幡社は楼門・拝殿・申殿・本殿・神楽殿などがたち、豪壮な境内である。楼門は三間一戸の入母屋造であり、文久2年の棟札があるが平成2年に焼失しその後復元されたものである。拝殿は宝暦12年（1762）に建立された桁行七間、梁行二間、入母屋造の大型拝殿、申殿は宝暦12年（1762）に建立された正面三間、側面三間、入母屋造（正面軒唐破風付）、本殿は宝暦12年（1762）に建立された三間社流造、銅板葺、神楽殿は三間半の入母屋造で棟に嘉永6年（1853）建立の墨書きが見られる。本殿・申殿・拝殿は市指定有形文化財に、社叢が市指定天然記念物に指定され



城原八幡社境内図

ている。

西宮神社は城下内の本町に鎮座する神社で、玉来から町家を移し城下建設を行った際、玉来から移動した商家が本町地区に多く住んでいたことから、玉来の鎮守である西宮神社を寛政9年（1797）に玉来の西宮神社を分霊して祀り、本町の鎮守としたのが始まりで、文化元年（1804）に祇園社と事代主神を祀る社を合祀して現在地に遷座した。社殿は本殿・拝殿からなり本殿は一間社流造、拝殿は正面三間、側面二間、入母屋造で、社殿は西南戦争時に火災に遭いその後建替えられたと伝えられ、現在まで幾度が改修が行われているが、明治期の建築様式が多箇所に残されている。



西宮神社拝殿

岡神社は城下内の田町に鎮座する神社で、明治41年に岡城内北ノ尾崎の愛宕社を現在地に遷座し、上田新府（上町・田町・新町・府内町の4組：現東部祭組合）で祀られていた祭神が合祀され祭神は14柱を数える。上田新府の住民が氏子となり岡神社と称するようになった。愛宕社の創建については「中川家御年譜」の元和4



岡神社拝殿

年（1618）の記述に「愛宕社並二願成院ヲ、城山ノ北ノ尾崎ニ建立」と記されている。社殿は本殿・拝殿からなり、本殿は三間社流造、拝殿は正面三間、側面二間、入母屋造で、建立年代については天保期の建築様式が見られ、岡城内の愛宕神社を移築したものであることから、少なくとも江戸時代後期の建立と考えられる。現在の岡神社には、社殿の瓦などに中川家の家紋である中川柏や中川轡の家紋が見られることから愛宕社の移設をうかがい知ることができる。

神明社は城下内の古町に鎮座する神社で、文禄3年（1594）に緒方原尻（豊後大野市緒方町）に鎮座する伊勢神宮分霊を奉安したのが始まりとされ、社殿は元



神明社拝殿

文3年（1738）に造営され、寛保元年（1741）に岡藩主の祈願所となった。明治10年（1877）の西南戦争で社殿が焼失したが、翌年現在地に再建された。社殿は本殿・拝殿からなり、本殿は一間四方の流造風の特異な形を有する。拝殿は正面三間、側面二間、入母屋造である。

夏越祭は、「竹田奇聞」（昭和20年発行）によると、宝暦12年（1762）に下木の仮御殿（竹田市大字会々下木：現豊後竹田駅裏）に八幡神の御神幸を行ったのが始まりとされ、安永2年（1774）に仮御殿が焼失したため御神幸は中止され、城原において3日間の祭典を行う様に変更された。安永6年（1777）から旧に復し松原（竹田市大字城原）



昭和29年の夏越祭の様子

へ御神幸が行われ、竹田町から囃子や段尻等の余興を催し御供行列を行った。明治3年（1870）に竹田町に悪疫が流行したため八幡神の神幸を願い、本町西宮神社へ御神幸が行われ、城下3社（西宮神社・岡神社・神明社）へ御神幸を行う現在の夏越祭の原型となった。昭和60年頃までは7月21日～24日まで3泊4日で神輿が城下町3社にそれぞれ1泊ずつ泊り、期間中城下町内を神輿のお練り（次の神社まで練り歩いて移動する）が行われ、俄芝居、子ども神輿の巡行、各神社組（現祭組合）による屋台や壇尻などが行われていた。現在は、1泊2日の祭りに短縮され3社が年ごとに受け持っている。



昭和40年代の夏越祭での子ども神輿

祭りは、城原八幡社で城原八幡社の関係者・城下の各祭組合の役員が参列し、お迎え神事が挙行される。神事では宮司による祝詞とお祓いが行われ、祭神を神輿に遷す祝詞が行われ、白装束を身にまとった若衆が神輿を担ぎ、神輿が城原八幡社を御発ちし城下まで御神幸する「オクダリ（御下り）」が行われる。かつては城原から城下まで神輿を担いでいたが、現在は城下町の入り口まで神輿を自動車で運んでいる。城下町の入り口（竹田駅前）に到着後、神輿を先導する平田獅子により獅子が徐々に目覚める様子を舞う御立ち舞が行われ神幸行列が出発する。御神幸の行列は、各町の8基の神輿（子供神輿として子供が神輿を引く）が太鼓を「ドドンコ、ドンドン」と打ちながら、子供たちの「チョーサジャ」の元



神輿の下を潜る様子

気な掛け声で御神幸行列を囃し立てて先導し、獅子、太鼓、六角、榊、城原八幡社の御輿3基の順で隊列を組み、城下町を廻る。神輿の御神幸時には沿道の参列者は神輿が巡ってくると両手を合わせ拝みながら神輿の下を潜り、無病息災を願う様子が御神幸ルート of 各所で見られる。また、各神社では平田獅子による勇壮な舞が行われる。

御神幸は竹田駅前を出発し、その年の受持ちの神社まで城下を町廻りするが、道順は受持ちの神社により異なる。平成25年度の夏越祭のルート为例にすると、駅前を出発し古町から下本町へ、塩屋土蔵の前を通過後右折し中本町へ、旧竹屋書店先を左折し上町通りへ、吉川家住宅前を右折し上本町へ移動する。上本町では右手に旧竹田荘を見ながら直進すると西宮社へ到着し休憩をする。西宮社を出発し上町新町・中本町へ移動し旧竹屋書店の交差点を左折し田町通りを直進する。佐藤家住宅前を通過し岡神社へ到着する。岡神社を出発し、上町・田町・府内町を通過し東本町から竹田市公民館竹田分館（旧一味楼）前を左折し、古町へ進み神明社へ到着する道順で行われた。受持ちの神社へ到着後、神輿を納め神事が行われ、神楽の奉納が行われる。翌日、再び神輿の御発ちを行い神輿は城原八幡社へ「お帰り」が行われる。神輿の「お帰り」の後、各祭組合の山車の巡行が神輿の御神幸とほぼ同じルートで行われ祭りが終了する。



山車の巡行（東部祭組合）



山車の巡行（本町組合）



神楽の奉納

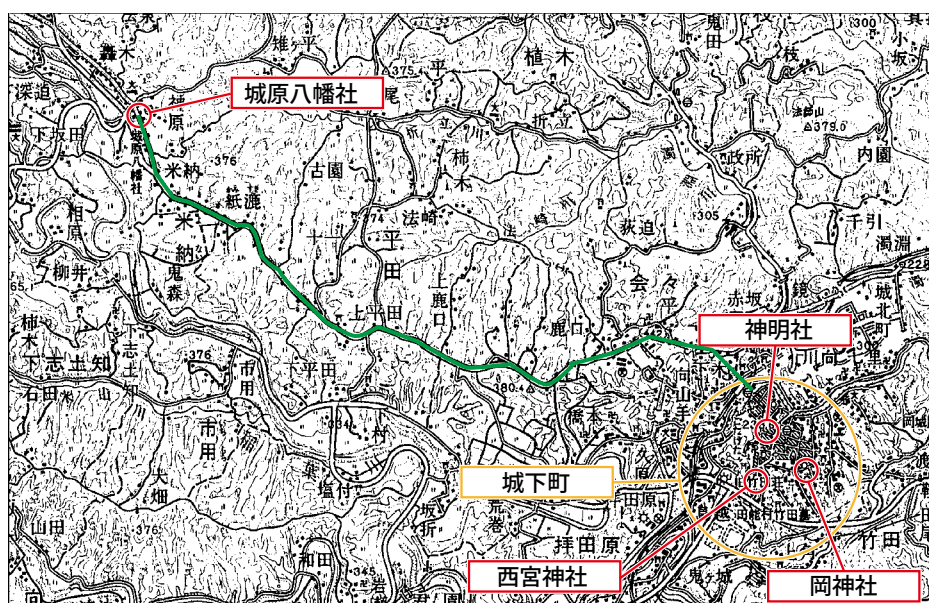


獅子舞の奉納

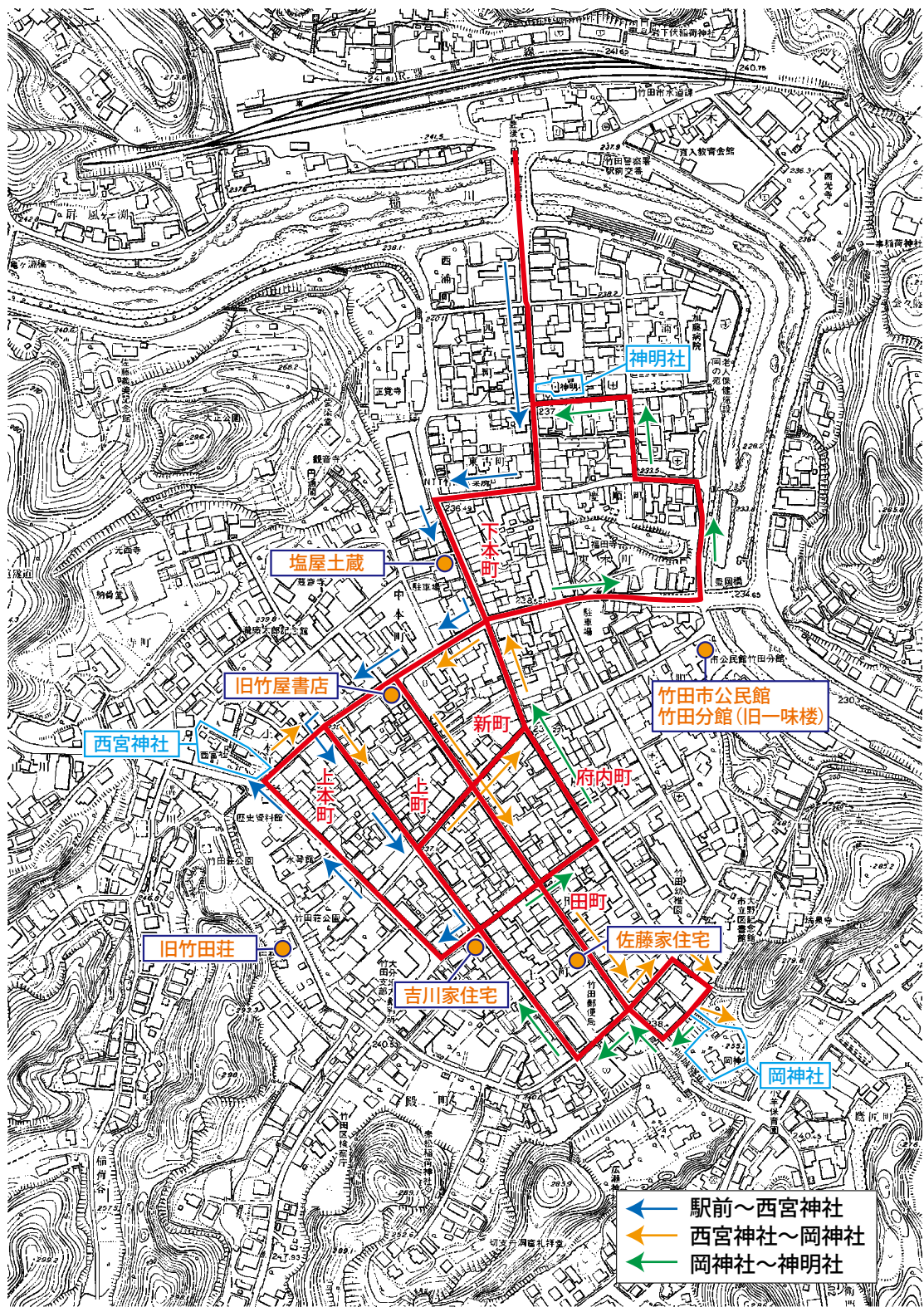
夏越祭は、城下町から離れた場所にある城原八幡社が近世初頭に一時的に城下町に遷座された歴史的経緯から、城下の町家の住民が氏子となり、城下町へ御神幸する祭りで、農村部の神社である城原八幡社を町部の住民が信仰するという極めて珍しい形態の祭事となったものである。城下内の各町が共同で祭りを開催するだけでなく、農村部である城原地域との繋がりが見

られ、夏越祭が城下町で開催される祭礼の中心となった。

夏越祭では、子ども達の元気なかけ声が響く中、神輿が城下町各町の氏子が行列を先導し、白装束の担ぎ手により城下町の3社を廻っていく。また沿道には人々が無病息災を願い、町家通りを埋め尽くすその様は、いつの世も変わらない城下町と農村部の人々の繋がりが感じられる竹田の夏の情景である。



夏越祭関連神社位置及び御神幸の道筋



平成 25 年度の夏越祭神輿御神幸ルート

(2) 西宮神社の八朔祭にみる歴史的風致

八朔祭の八朔は旧暦の8月1日（朔日）のことで、古来この時期は早稲の初穂が実る時期で、五穀豊穡を願う農耕儀礼の一つとして始まったものが、広まったものである。西宮神社の八朔祭は、西宮神社の氏子である本町の住民により行われる祭りであり、商売繁盛・五穀豊穡・家内安全を願い、本町の各商店が商品や生活用品を使い見立て細工を出し、別名本町祭りとも呼ばれている。



西宮神社

八朔祭は、神事を行い、町内を神輿の御神幸を行うことにより地区の氏神である西宮神社に本町地区の繁栄祈念する祭りである。また、御仮屋において行われる様々な催しや見立て細工は神への奉仕であると供に、祭り見物に訪れる近隣の農村地域の人々への本町商店街の宣伝効果でもあったと言える。様々な催しにより人を集め、各商店は商品を材料とし見立て細工を造り、店頭に掲げ商品の宣伝をする。近隣の農村地域の人々は八朔祭の賑わいを楽しみにしており、余興見物や買い物を行う。



手水場の覆屋(旧藩校由学館の門)

西宮神社は城下町西端の高台にある神社であり創建については、寛政9年（1797）に玉来の西宮神社を分霊して祀り、本町の鎮守としたのが始まりで、文化元年（1804）に祇園社と事代主神を祀る社を合祀して現在地に遷座した。本殿・拝殿からなり、境内にある手水場の覆屋は藩校「由学館」の木造瓦葺の四脚門を移築したもので、市指定有形文化財となっている。



八朔祭神事

祭りは、本町組によりとりおこなわれる。西宮神社で神社総代と本町組役員が拝殿に整列し、宮司の二拝二拍手一拝に合わ



神輿御神幸

せて参列者が拝を行い神事が始まる。宮司による祝詞奏上があり、次に参列者へのお祓いが行われる。次に神殿から神輿へ神を移す祝詞が行われる。次に宮司による玉串奉奠が行われ、参列者が総代から順に玉串を奉奠し、二拝二拍手一拝を行い神事が終了する。神事に続き、本町組氏子が神輿引き、八朔祭の舞台である本町地域を静々と廻り、御仮屋（現在はふれあい駐車場と歴史資料館駐車場を各年で行っている）まで御神幸する。御仮屋に到着後、神事が執り行われ、神楽や余興が行われ、御仮屋は勇壮な神楽の調子や華やかな踊りの調子と、それを見物する人々により賑やかになる。明治44年（1911）の竹田小学校同窓月報「竹友」に「上本町の講談、中本町の浄瑠璃、下本町の軍談、鍛冶屋町の浄瑠璃なりき何れも人足を止めたるも下

本町の久松梅玉の軍談は人気最も澤山」と八朔祭での余興の様子が記されている。現在では浄瑠璃や講談等の余興の名残として舞踊や太鼓などが行われる。夕刻になると氏子により神輿「御帰り」があり、西宮神社に神輿を納め、



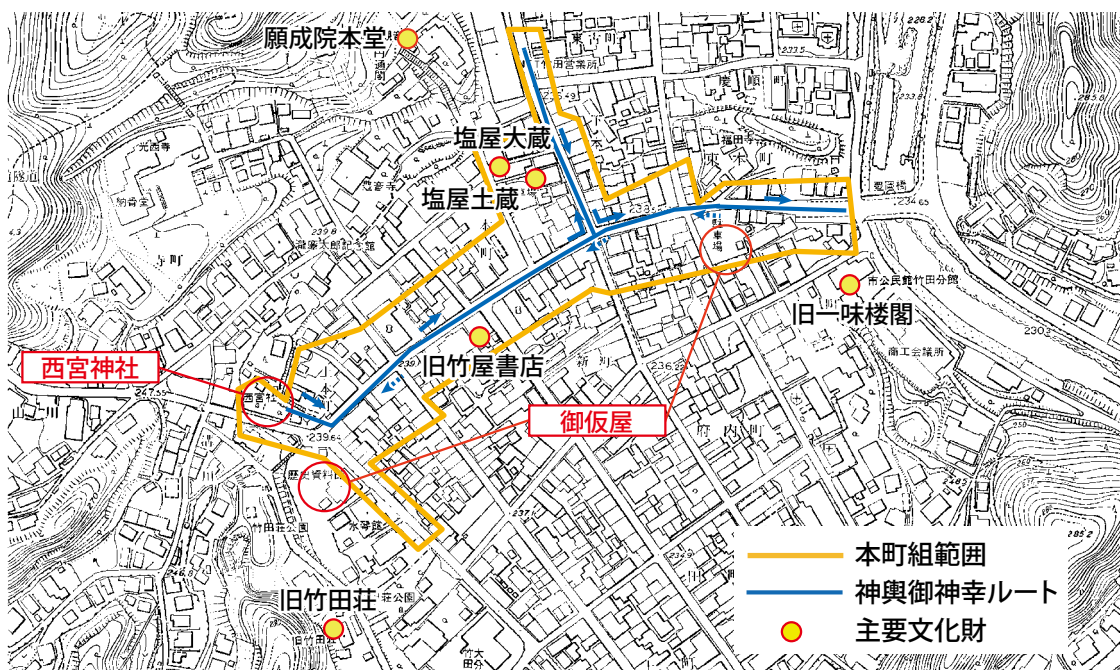
各商店の店先にある見立て細工(サル・タワシ・スリッパ等を使用している)

神事を行い祭りが終了する。また、祭りでは各商店が商品や日用品を用いた見立て細工を作り店先に並べ祭りの賑わいを創出し、氏子や参列者が出来具合を批評したりする。

八朔祭が行われる本町は、旧竹屋書店（登録有形文化財）や塩屋土蔵（登録有形文化財）等の城下町に残る歴史的に価値の高い町家が残されており、城下を南北に横断するメイン通りとして繁栄した地区である。八朔祭では、商売繁盛を願う人々の思いが見立て細工となって町中に飾られ、その中を、五穀豊穡を願いながら神輿が練り歩いていき、見物者や買い物客で町中は賑わう。その姿が1つに重なり合い、城下町が普段にも増して賑やかに活気づく様子は城下町竹田の夏の風物詩となっている。



御飯屋での神楽奉納



八朔祭神輿御神幸ルート

(3) 岡神社の善神王様祭^{ぜ じんのうさままつり}にみる歴史的風致

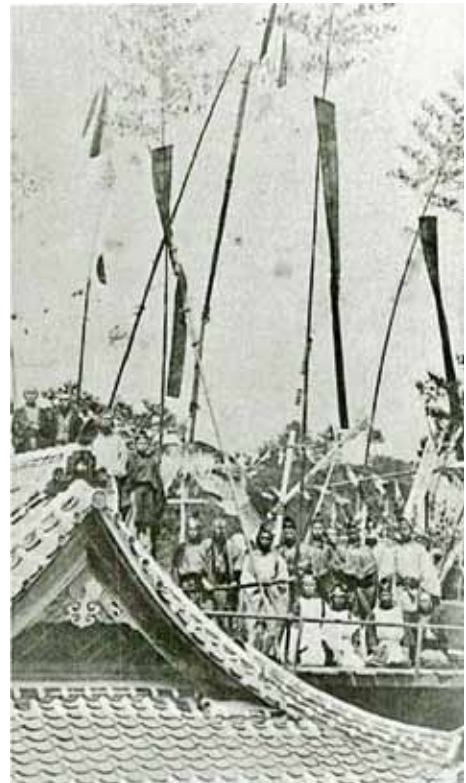
善神王様祭は、城下町の東端の高台にある岡神社で開催される。善神王とは景行天皇から仁徳天皇まで5代の天皇に大臣として仕え国政を補佐した人物である。当初は田町に善神王社があったため、上田組（上町・田町）の祭りであったが、明治41年（1908）に善神王社が岡神社へ合祀された後は、東部祭組



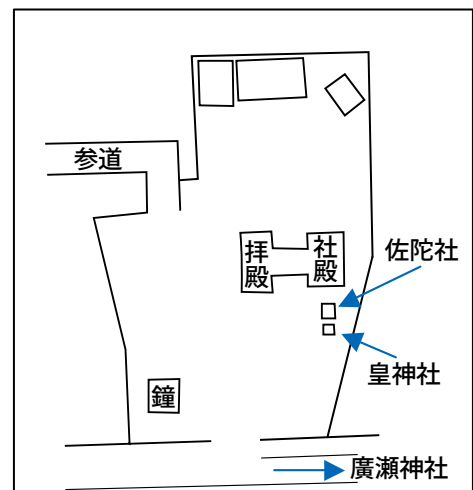
岡神社拝殿

合（上町・田町・新町・府内町）により岡神社周辺で開催する祭りとなっている。岡神社の周辺には、佐藤家住宅（登録有形文化財）、軍神廣瀬武夫を祀る昭和10年建築の廣瀬神社、明治42年に大分県下で2番目に設立された図書館である「竹田文庫」を前身とする市立図書館（現図書館は昭和35年建築）がある。

岡神社は城下町内の田町に鎮座する神社で、明治41年（1908）に岡城内北の尾崎にあった愛宕神社の社殿を移築した神社で、城下町の新町・府内町・上町・田町に存在した数社を合祀しており祭神は14柱を数える。社殿は本殿・拝殿からなり、本殿は三間社流造、拝殿は正面三間、側面二間、入母屋造で、岡城内の愛宕神社を移築したものであることから、江戸時代後期の建立であると考えられる。善神王様祭は、本来旧暦の8月1日から11日間行われる旧善神王社の祭りを岡神社の祭りとしたもので、小松明（松明を灯し並べたもの）が灯され、参詣者には甘茶が振舞われた。この祭りは、古くさかのばれば、城下町が建設される以前の竹田村時代の風祭り（台風などの風害除けの祭り）と虫送り（農作物に付く害虫駆除を行い豊作祈願する祭り）であり、農村部における豊作祈願祭りであったが、城下町建設以降も善神王社の祭りとして残っていた。明治時代にこの地域の神社が合祀され岡神社となった際に、大祭として取り入れた



岡神社竣工式典（明治41年）



岡神社境内配置図

ものである。大正12年（1923）の「竹田小学同窓月報」によると、善神王様祭は「例年の通り九月十一日から二十一日まで十一日間岡神社で執行された」とあり、戦前は11日間行われていたようであるが、農業に関する祭りであったため、町家を氏子とする岡神社にはなじまなくなり、しだいに祭りの開催期間が短縮された。

現在は9月7日の1日間の開催となっている。

祭りは、総代と東部祭組合役員（氏子）らの参列者が、岡神社の神殿前に整然と整列し、宮司に合わせ参列者が二拝二拍手一拝を行い神事が始まる。次に宮司により祝詞とお祓いが行われる。お祓いでは参列者は神殿に向かい頭を垂れる。次に宮司が神殿から神輿（近年は櫛になっている）に神を移す祝詞を唱える。櫛に神が移り終えたら、まず宮司が玉串奉奠を行い、引き続き総代長、その後に参列者が玉串奉奠を行い、宮司に合わせ二拝二拍手一拝を行い、社殿での神事が終了する。神事後、御仮屋へ神輿の御神幸が行われていたが、近年は櫛を神輿に見立てて御仮屋まで総代らの手により運ばれ、御仮屋へ捧げられる。その後、御仮屋前に参列者が整列し、御着きの神事が宮司の祝詞により行われ、神が御仮屋に納まる。御仮屋には氏子により舞台を設けられており、神に神饌が奉納され、参列者は御神酒を給わり、神にささげる宴として、神楽の奉納や踊りなど芸能が行われる。この芸能見物に、城下町や周辺地域の人々が訪れ賑わいを見せる。夜になると御仮屋を見下ろす高台に小松明が灯され、城下町の宵のうちを優しく照らし、祭りに華やかさが加わる。



社殿での神事の様子



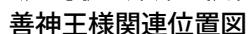
御仮屋での神事



神楽の奉納



小松明の様子

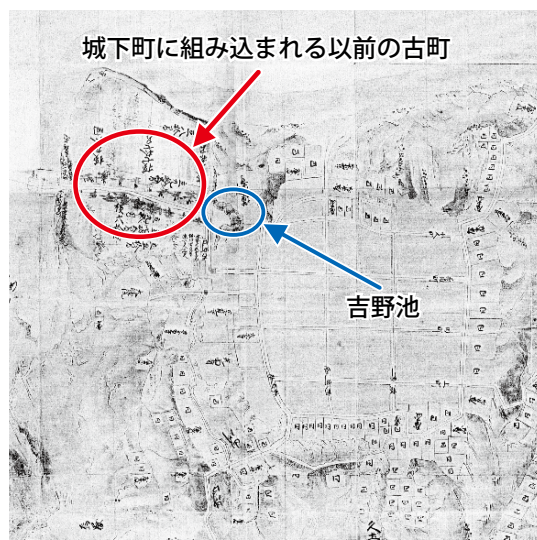


(4) 神明社の大祭にみる歴史的風致

岡藩による城下建設は現本町筋より東側の地域が整備され、古町は寛文4年(1664)城下町に組み込まれた新しい町である。城下に組み込まれる以前は、本町筋と古町の境に吉野池があり、この池を境として古町は在町として残され、吉野池の北側に城下の出入り口である構口が設けられていた。城下の発展に伴い吉野池が埋め立てられ、古町も城下へ組み込まれ、以後城下町の入り口として繁栄してきた。

神明社は古町の中央部に鎮座する神社であり、とようけひめのみこと天照大神と豊受比女命が祀られており、大祭は5月1日～2日にかけて古町祭組合により行われる。「神明社由来」によると、原尻(豊後大野市緒方町)の伊勢神宮の分霊に竹田からの参詣者が多かったことから、文禄3年(1594)に原尻の伊勢神宮分霊を伊勢屋川口右衛門宅に奉安し神明社と称したのが始まりで、城下町の発展に伴い各町ごとに氏神を祀る機運が高まり、古町でも神明社を氏神と崇められるようになり、町内の人々により社殿が正覚寺小路の角に元文3年(1738)に造営された。また、寛保元年(1741)には岡藩6代藩主中川久忠の祈願所となり、神社地の課役が免除された。明治10年(1877)の西南戦争で社殿が焼失したが、翌年、正覚寺小路角から現在地に奉遷され社殿が再建された。社殿は本殿・拝殿からなり、本殿は一間四方の神明造銅板葺、拝殿は正面三間、側面二間、入母屋造瓦葺である。境内には八坂多賀・猿田彦社・住吉社・西宮社・天満社・稻荷社・春日社・琴平社の各社が祀られている。

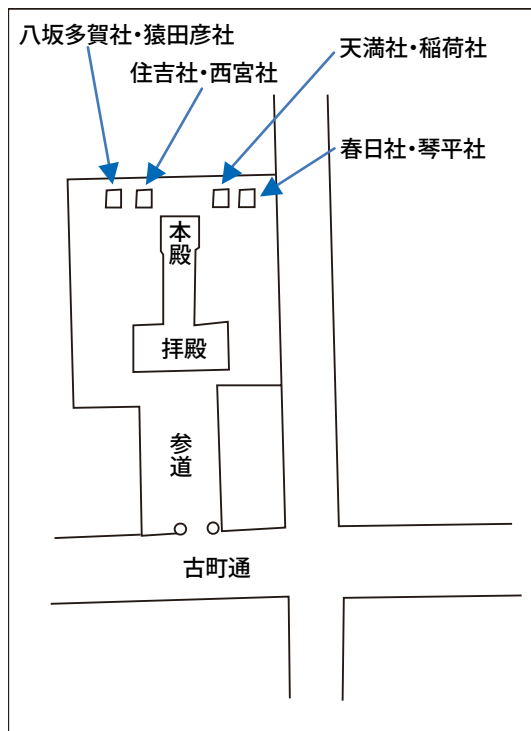
神明社の大祭は、古町地区の氏神である神明社



城下町絵図(寛文4年以前)



神明社拝殿



神明社境内図

に、古町地区の繁栄を祈念して行われる祭りで、5月1日と2日の2日間にわたり執り行われる。初日の5月1日は、氏子により神明社の清掃や祭旗立など大祭の準備が行われた後、総代や祭組合員（氏子）が神明社へ集まり、宮司に合わせ参列者が二拝二拍手一拝を行い神事が始まる。次に宮司により祝詞とお祓いが行われる。次に宮司によ



神明社社殿裏の社

る玉串奉奠が行われ、総代・祭組合の代表による（左：八坂多賀社・猿田彦社 右：住吉社・西宮社）玉串奉奠が行われる。最後に宮司に合わせ参列者が二拝二拍手一拝を行い初日の祭典は終わる。

翌2日は、神楽の奉納や催し物が行われ賑わいを見せる。明治41（1908）の竹田小学校同窓月報に「本月1日古町神明社にても祭典執行され有格社なれば奉幣使の参向あり、夜に入りては素人芝居軍談等有之候ひて古町辻も通行止の有様に候ふき」とあり、かつては芝居や軍談などの催しが行われ、古町の通りに通行止めとなるほどの人出で賑わっていた。祭りの期間に古町の住民が五目寿司を作って友人知人に振舞うことから、別名「寿司祭り」とも呼ばれている。寿司祭りの由来は、定かではないが一説には古町在住の料理人が、岡城の殿様に寿司を振舞ったところ、殿様が大変お気に入りになり喜んだ料理人が祭りで寿司を振舞ったことが由来とされている。



神明社の大祭の様子

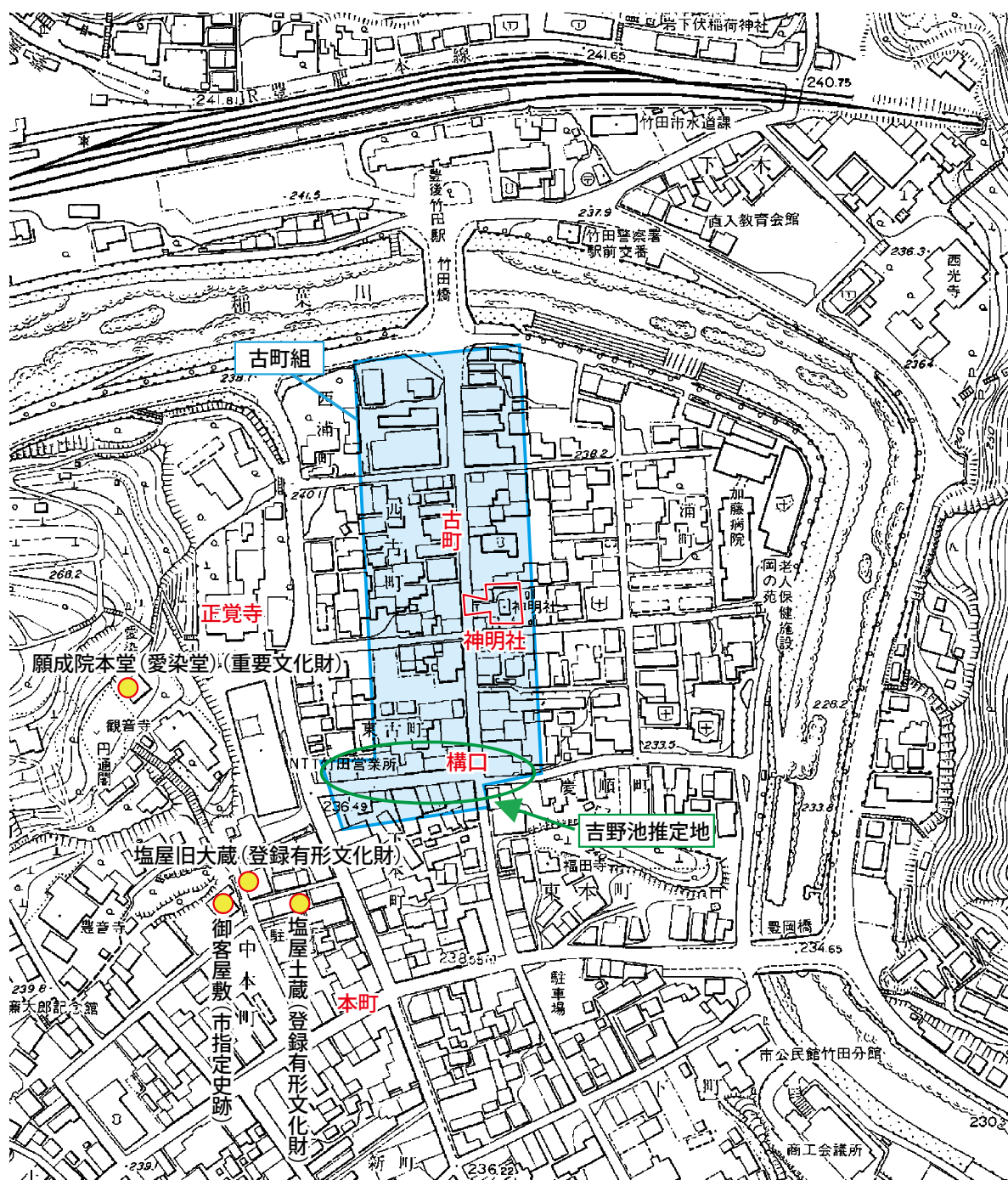


神楽の奉納

寛文4年（1664）城下に組み込まれた古町は、南北に延びる古町通りを挟み町家が連なり、通りの中央部にある神明社は古町地区の氏神として古くから崇敬されてきた。古町の繁栄を祈念する大祭では氏子により厳かに神事が執り行われる。翌日は神楽や催しにより、周辺地域から多くの見物客が訪れ古町通は賑わいに包まれ、訪れた人々に寿司を振舞う。神明社の大祭は城下町の入り口として繁栄してきた古町地区の固有の歴史的風致を見ることができる。



寿司の振舞いの様子



神明社の大祭関連位置図

(5) 城下町の恵比寿講にみる歴史的風致

城下町に見られる祭礼である恵比寿講は、城下内の町家を中心に、数件の家で組織された講組により、江戸時代から継続して行われている。

江戸時代の城下における町家は本町・上町等の「町」の集合体であり、その「町」はいくつかの「組」により構成されている、城下で暮らしを行う住民は「組」単位で葬式の手伝いを行うなどの共同で生活を維持していく仕組みが存在していた。恵比寿講もこの「組」単位で城下町の町家群全域に存在している。



下本町下組恵比寿講文書

下本町下組には嘉永7年(1854)からの恵比寿講の記録である「下本町下組恵比寿講文書」(市指定有形民俗文化財)が残されているほか、他の組でも明治・大正期の恵比寿講の記録が確認されている。これらの記録により江戸時代後期には城下町で恵比寿講が行われていたことをうかがい知ることができる。現在は24組の恵比寿講が確認されている。

また、恵比寿講が行われる町家には、歴史的な建造物が数多く残されている。下本町地区にある元治2年(1865)の棟札がある木造土蔵造の登録有形文化財塩屋土蔵(主屋・中蔵・古蔵)、田町地区には明治12年に建築された平入りの主屋と旧店舗兼主屋が、妻入の旧味噌蔵を挟んで並び、変化のある町並み景観をつくり、敷地後方には土蔵が配される登録有形文化財佐藤家住宅、上町地区には明治11年に造酒屋を営むために建てられた木造土蔵造の主屋・土蔵・木造倉庫3棟・中庭で構成される市内の町家を代表する建築物である登録有形文化財吉川家住宅があり、周辺において恵比寿講が執り行われている。



佐藤家住宅(登録有形文化財)



吉川家住宅(登録有形文化財)

恵比寿は漁業・漁師の神であるとともに商業・流通の神でもあり、この恵比寿を町場で祭ることは組を構成している商家の繁盛を願って始められたと同時に、共通の神である恵比寿を祭るという行為を通して、「組」の親睦を図るとともに、共同体としての意識を喚起し、相互に扶助し全体で繁栄していこうという願いも込められていたといえ、現在もなお、城下町で生活する人々が共同して生活を維持するしくみである講組が、恵比寿講をつうじて見ることができる。

恵比寿講は本来旧暦の2月3日に行われていたが、近年では2月下旬から3月上旬の土日に行われる組が多い。恵比寿講は、各講組により若干の違いはあるがほぼ同じような形態でとり行われる。平成25年に上本町組で行われた恵比寿講では、座前（講組の代表）が組の人々に回覧や掲示板により恵比寿講開催を呼びかける。祭礼当日は、前回の座前の家に講組の人々が集まり竹を立て、幕を引垂れ、しめ縄を張る等して祭壇を作り講の準備を行う。祭礼の時間になると前の座前の挨拶があり、神職を招き「お立ちの御神酒上げ」の神事を行う。神事では神職による祝詞が行われ、次に神職による玉串奉奠が行われ、前の座前から順に講組に所属する全家庭が玉串を奉奠する。神事が済むと、座前が先頭で恵比寿様を抱え、その後ろを講組の人々が続き、講組を一軒一軒廻る「町廻り」を行う。「町廻り」では笹を持ったり、「ドン・ドン」と太鼓を鳴らしながら行う組もある。講組内を廻り座前の家に到着すると、鯛や野菜などを備えた祭壇で神事を行う。その後座前の家で「直会」が行われるが、近年は集会所や料亭で行われることが多い。座前の家で1年間祀られた恵比寿様は翌年の恵比寿講において、次の座前の家に移す、この組内での持ち回りが本来の形であるが、近年は各家で恵比寿を祀ることが困難な状況が生まれた組もあり、別に社を設けたり、寺社に預けたりしている組も数組ある。



前年の座前の家での神事



町廻り



座前の家での神事



直会の様子

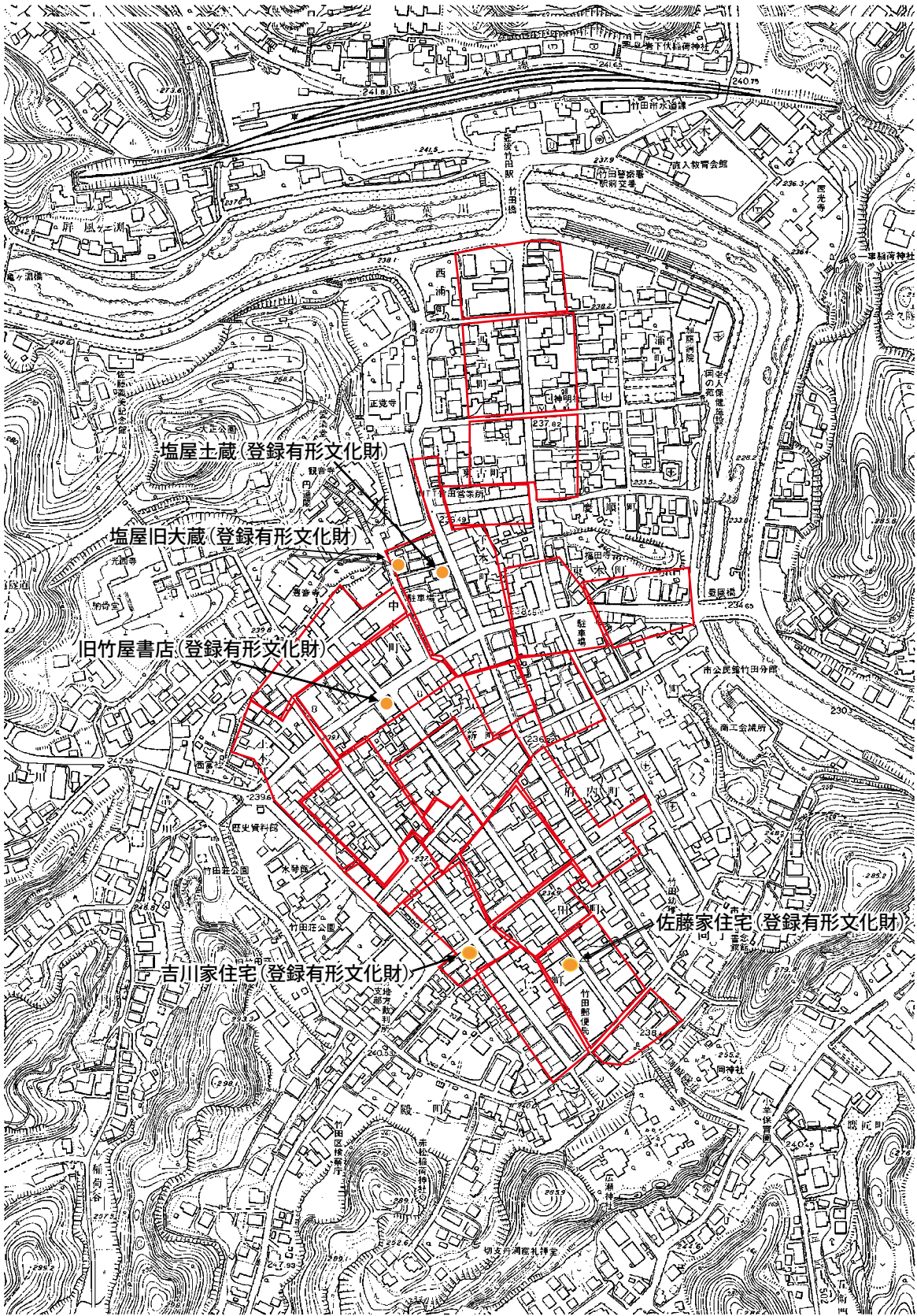
早春の城下町で恵比寿様を抱え、佐藤家住宅や吉川家住宅などの歴史的な建造物が立ち並ぶ城下町において静々と行われる恵比寿講の町廻りは、華やかさはないが昔ながらの町家と溶け込み、恵比寿講を通じて、「組」の親睦を図るとともに、共同体として全体で繁栄していこうという願いは、延々と継承されてきた地域住民の絆の証であり、城下町の繁栄を支えてきた町家の人々の住民活動の礎となるものであると言える。



上本町組の恵比寿像



上町中組の恵比寿像



城下町恵比寿講分布図

(6) 旧竹田荘と豊後南画の祖田能村竹田顕彰活動にみる歴史的風致

岡藩城下町は、江戸時代以降奥豊後における政治・経済・文化の中心地として栄えてきた。今もなお城下町建設当時の町割りで住民が生活をし、史跡旧竹田荘や重要文化財願成院本堂（愛染堂）をはじめとする歴史的な建造物が数多く残されている。また、田能村竹田・瀧廉太郎・廣瀬武夫・朝倉文夫・佐藤義美などの偉人を数多く輩出する土壌を培い、今なお当時の面影のままの町並みから歴史と文化を感じることが出来る。それらの偉人を顕彰する活動が市民により行われている。

田能村竹田（1777～1835）は、安永6年（1777）岡藩医田能村碩庵の次男として生まれ、天保6年（1835）大坂中島の岡藩蔵屋敷で没した。諱は孝憲、幼名を磯吉、通称は行蔵である。「竹田」は田能村家の居宅（竹田荘）が竹田村にあったことから付けた号である。竹田は幼少から学問に非凡な才能を示し、早くから藩校由学館に勤務した。22歳の



田能村竹田像

時には、幕府の内命により岡藩が編纂した地誌『豊後国志』の編纂員となり、師・唐橋君山の下で豊後各地の調査に従事した。唐橋没後は編纂実務の中心となり、『豊後国志』の幕府献本について江戸で幕府老中と最終折衝を行った。『豊後国志』編纂終了後の文化2年（1805）、29歳の時竹田は初めて上方に遊学し、^{うらかみぎょどう}浦上玉堂、^{おかだべいさんじん}岡田米山人、^{むらせこうてい}村瀬栲亭ら文人、儒者たちとの交流を通じて自分の詩学の力量に自信を深めた。また、この遊学中から自身の健康問題や詩学への情熱のため早期の隠居を希望するようになった。隠居希望は周囲の説得もあり容易にはかなえられなかったが、一子太一（如仙）の誕生・成長により、文化10年（1813）竹田37歳の時、隠居が藩に許可された。竹田は以後、ほぼ毎年上方を中心に諸方を旅して^{らいさんよう}頼山陽、^{ひろせたんそう}廣瀬淡窓、^{かんちゃざん}菅茶山、^{あおきもくべい}青木木米、^{すえひろうんげ}末広雲華ら各地の文人たちと交流を深めた。特に頼山陽との親交は厚く、竹田の傑作「^{またまたいちらくちよう}亦復一楽帖」「^{しょうらんこじず}松巒古寺図」（いずれも重要文化財）に関連する挿話が遺されている。また、竹田の文人としての名声の高まりも文政元年（1818）に山陽が竹田荘を訪問したことがきっかけであった。竹田は儒学者として出発し、茶道や香道にも通じたが、若年より文人の嗜みの一つである作画への関心はあった。

竹田の本格的な作画が始まるのは、最初の上方遊学から帰国した、竹田が30代のときからである。竹田の初期作品は花鳥図に優品が多いが、山水画は中国画の模倣の側面が強い。竹田が独自の画法を確立するのは、文政9～10年（1826～27）の長崎旅行を契機としている。竹

田はこの旅行において、長年憧憬の対象であった中国の人や文物を直接見聞し、日本と中国の人、風土の差異を実感した。そうした経験を通じて竹田は以後日本の情趣に満ちた作品を遺し、我が国を代表する南画家の一人となった。また、竹田は画作だけでなく画の批評についても当時は評価の低かった浦上玉堂を評価するなど時代に先駆けた識見を持っていた。竹田の優れた批評眼による画論『山中人饒舌』^{ちくでんそうしゅうがろく}『竹田莊師友画録』は、江戸時代絵画史を研究する上で現在も必読のものとなっている。このように実作者としても批評家としても優れた才能を持った竹田とその充実した南画作品の登場は、絵画の流派的展開の乏しかった豊後の画人たちに大きな影響を与えた。

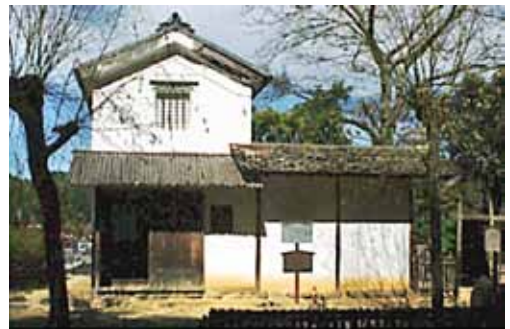
竹田の門下からは高橋草坪・帆足杏雨・田能村直入ら優れた力量を備えた画人が輩出されたことに加えて、多くの豊後の画人たちが南画作品を制作したことで、豊後は幕末から近代にかけて南画の一大中心地となった。特に竹田のお膝下とも言える城下町竹田からは、淵野桂儼^{ふちのけいせん}・渡邊拈華^{わたなべねんげ}・田近竹邨^{たじかちくそん}ら有名無名含めて多くの南画家が生まれた。これは城下町竹田の人々が、竹田の活動の影響を直接に受ける機会が多かったためと考えられる。竹田は諸方を旅したが、終生拠り所としたのは竹田荘であり、城下町竹田の人々であった。

また、竹田の生家でもあり、豊後南画の塾ともなった史跡旧竹田荘は、城下の上殿町の北面した高台の上にある。寛政元年（1789）の城下町大火の際、類焼を受け全焼し、翌寛政2年（1790）に母屋が再建された。1階を茶室、2階を書庫とした草際吟舎^{そうさいぎんしゃ}は文化3年（1806）、竹田の門人たちの塾である補拙廬^{ほせつろ}は文政9年（1826）に建てられたとされているが、草際吟舎・補拙廬は明治年間に取り壊され、昭和7年

に古図を基に再建されたものである。現在の旧竹田荘は通路から数段の自然石の石段を登ると屋敷地の入り口である冠木門がある、母屋は西向きに玄関を持つ2階建瓦葺の建物で、2階3室のうち10畳が竹田の書斎「対翠楼（雪月楼）」^{たいすいろう}であったと伝えられる。母屋の裏に木造1階建瓦葺で切妻の屋根を持つ補拙廬、木造土蔵造2階建で1階に茶室を持つ草際吟舎、池を



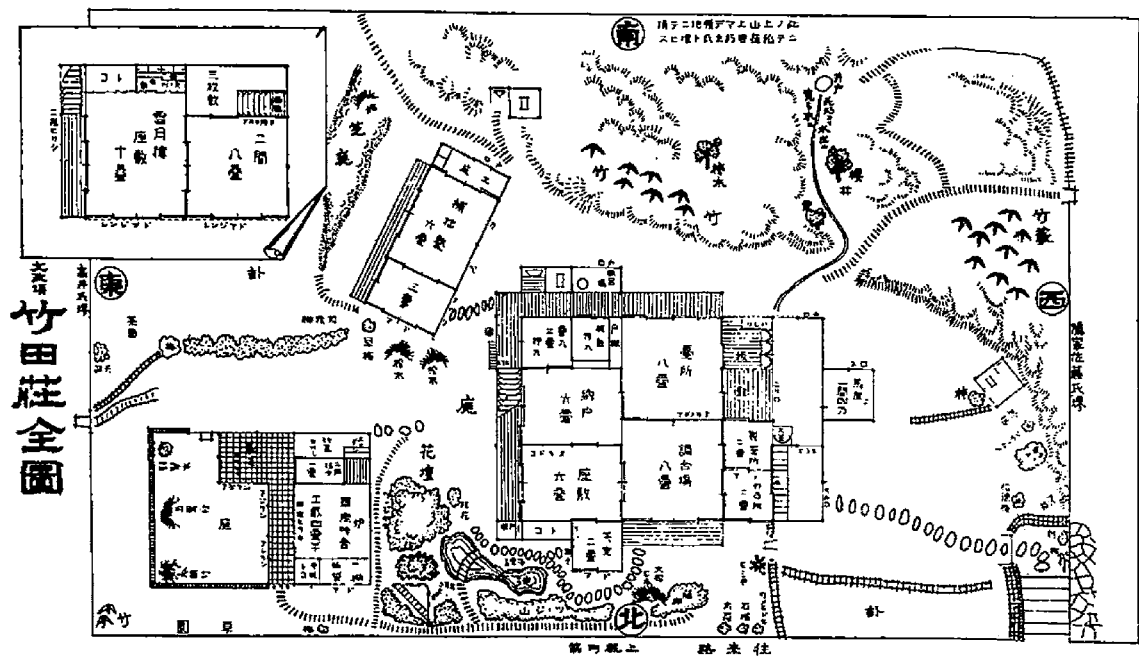
旧竹田荘母屋



旧竹田荘草際吟舎



旧竹田荘補拙廬



竹田荘全圖（竹田の嫡子、田能村如仙が描いたもの。三角停（損停）、補拙廬附帯便所は現存していない）

有する庭園に筆塚があり「兀たる石、
以って汝の恩の証を記す」と竹田の
手で書かれている。旧竹田荘西側には
竹田会により建設された木造入母
屋造の内部に竹田を祀る祭壇及び茶
室を有する画聖堂がある。また、旧



画聖堂



田能村竹田の墓

竹田荘の西にある胡麻生峠には、田能村竹田の遺髪を納めた田能村竹田の墓が存在する。

竹田が活動した 19 世紀、城下町竹田では漢詩や中国から新しく入ってきた絵画を巡り身分を超えた交流が生まれていた。竹田はそうした環境の中で、地元の人々と詩や絵について議論を交わし、また地元の人々は竹田から最先端の文化的知識を得るなど、双方が刺激を与えあ

っていたと考えられる。「竹田奇聞」によると、城下町竹田における漢詩や書画を語らう場として「水石会」が設けられ、そこから田能村竹田を顕彰する会である「竹田会」（大正 10 年頃）へ発展したと記されていることから、少なくとも大正 10 年頃には竹田の顕彰活動が行われていたことがわかる。



田能村竹田百年を記念し竹田駅に作られたアーチ

「竹田会」は明治維新後田能村家の手を離れ、荒廃していた竹田荘を買い取り、竹田町（現竹田市）に移管するという史跡整備の走りと

もいえる活動を行っていることは注目される。

「竹田会」は昭和 59 年（1984）の「田能村竹田 150 年祭」に際し、発展解消され「財団法人田能村竹田顕彰会」が設立された。その活動は「竹田会」の活動も含め、毎年行う竹田先生年祭に加え、これまでに「田能村竹田 100 年祭」での画聖堂の建設（昭和 9 年）、「田能村竹田 150 年祭」等の区切りの年には地域をあげての祭典を行ってきた。毎年行われる竹田先生年祭は 11 月 1 日～3 日の 3 日間行われ、11 月 1 日は、田能村竹田の墓において竹田墓前祭を行う。墓前祭では、顕彰会の役員や関係者が参列し、まず市内のお寺の住職によるお経が行われ、顕彰会理事長から順に焼香が行われ厳粛な雰囲気の中で田能村竹田の冥福を祈る儀式が行われる。2 日は、史跡旧竹田荘において茶会が催される。茶会は、旧竹田荘母屋にて濃茶、草際吟舎にて煎茶、画聖堂前の庭にて野点が行われ、訪れた人々に茶が振る舞われる。この茶会は翌 3 日も開催される。3 日は、画聖堂において献茶式が行われる。献茶式では、画聖堂内の祭壇前で煎茶と濃茶が同時に点てられ、茶の湯に造詣の深かった田能村竹田像に捧げられる。その後、市内のお寺の住職による法要が営まれ、顕彰会理事長の挨拶で献茶式が終了する。他に竹田先生年祭では田能村竹田や弟子たちの作品を展示する遺墨展も 3 日間画聖堂で開催される。また、10 年毎や 50 年・100 年の節目に行われる年祭では、田能村竹田に関する出版物を発行するなど田能村竹田顕彰活動が続けているほか、近年には「まちかど南画館」として城下町内の各所にて田能村竹田の作品を紹介している。また、竹田文化会館を会場として「田能村竹田先生を偲ぶ美術祭」（昭和 23 年～）を竹田市と共催し市内外の児童・生徒へ田能村竹田の偉業を伝え、次代の田能村竹田を育てる活動も行っている。



墓前祭の様子



茶 会



献茶会



田能村竹田先生を偲ぶ美術祭

その他に、竹田商工会議所青年部が昭和 49 年～平成 16 年の 30 年に渡り、田能村竹田の作品を中心に南画作品を紹介する展覧会「文人書画展」を開催し、その時制作された図録は豊後南画作品の貴重な資料集となっている。また、昭和 56 年（1981）には伝統的文化的都市事業の一環として、竹田荘の膝下に竹田市立歴史資料館が開館した。資料館では開館以来、田能村竹田、南画作品を主要研究テーマとし、常設展では収蔵する竹田他の南画作品を紹介し、年に 1 回研究成果を反映した特別展を開催している。

また、稲葉川沿いに並べられた田能村竹田作品の陶板展示の起点となる稲葉川やすらぎ公園は文化 8 年（1811）に起こった四原一揆時に城下町へ乱入しようとした一揆勢が集結した山手河原と呼ばれる場所であり、田能村竹田はこの一揆に対し、百姓の要求を聞き届けるべきと建言書を差出し、藩政への意見を上申したとされています。



竹田作品の陶板碑のある稲葉川やすらぎ公園

また、竹田荘周辺には竹田荘公園が作られ、田能村竹田の弟子である田能村直入の顕彰碑などが置かれており、市民が普段のくらしの中で先人の残した偉業に触れることができる。



竹田荘公園

竹田市には、田能村竹田、瀧廉太郎、廣瀬武夫など数多くの偉人を生み出しており、市内ではこの先人たちを顕彰する団体が組織されて盛んに活動が行われている。その中でも田能村竹田の顕彰活動は、明治初期の「水石会」の誕生以来、「竹田会」「田能村竹田顕彰会」と名前を変え、近年では、「南画の里づくりをすすめる会」の市民団体も組織されるなど、現在も続けられている。

老若男女を問わず多くの市民が竹田の冥福を祈りつつ、茶会や美術祭など竹田の残した偉業に触れることで、旧竹田荘をはじめ城下町全体が、主客一体となった風流な雰囲気にも包まれている。



田能村竹田顕彰活動関係位置図

(7) 久住高原の野焼きにみる歴史的風致

竹田市の北部（久住地区・直入地区）は久住連山の裾に広がる高原地帯である。江戸時代には豊後と肥後を結ぶ肥後街道、竹田と日田を結ぶ日田往還が交差する交通の要衝として栄えており、この街道は現在でも主要な道路として利用されている。また、久住連山を源とする湧水や温泉が各所に湧出しており江戸時代以降湯治場として利用されている。久住高原は久住連山南麓の裾野に広がる標高 600m～1,000m の高原であり、阿蘇くじゅう国立公園に含まれる。久住高原は黒色火山灰土におおわれており、ネザサ・ススキ・ワラビなどの自然草が植生し、長い年月の間、牛馬の放牧や採草の為に、野焼きを行い、草原の景観を維持してきた人為的草原である。これらの草原は入会権のある採草放牧地であり、古来から「むら（現牧野組合）」が管理してきた土地である。



久住高原の草原



放牧の様子

久住高原の歴史は古く、鎌倉時代に源頼朝が梶原景高・仁田忠常等を阿蘇神社に使わし宮司から巻狩りの作法を学ばせ、その先導で久住山の裾野で巻狩りを行った場所であり、また古来より馬飼育が盛んに行われ、江戸時代になると農耕・運搬用の牛馬の飼育が盛んとなった。久住手永文書の「文政 12 年天



県農水研究指導センター（産肉検定牛舎）

保 2 年卯年日記」によると放馬について連絡を取合う記述や、野方焼方（野焼き）の日限について連絡を取合う記述が見られることから、江戸時代には牛馬の飼育や野焼きが行われていたことがわかる。

明治時代以降は、使役用のみでなく食用とし牛の需要が増え、草原は畜産飼料の供給源、また放牧地として人々の生活を支えてきた。特に、大分県種畜場（現大分県農林水産研究指導センター畜産研究部）が設立されて以降、県内の畜産を代表する地域となっている。大分県農林水産研究指導センター畜産研究部は 明治 39 年に県種畜場として、久住高原に設立され、家畜の改良・繁殖・飼養管理・人工授精・大分県に適した放草の選定など、畜産全般にわたる技術開発や普及を行っている。センター内の建造物に木造倉庫（昭和 7 年）、木造 1 階建の旧水車舎（昭和 21 年）、木造 2 階建の産肉検定牛舎（昭和 27 年）、木造 2 階建の種雄牛舎 2 棟（昭

和 39・40 年）が現存している。

草原は、繁殖雌牛を草地に放し飼いにする放牧や冬季の飼料の為の干し草の原料となることから、久住高原では古来より野焼きを行うことにより木々の繁茂を防ぎ、焼灰が肥料となり良好な草原の維持をおこなっている。



防火帯(ワチギリ)



ワチギリを行う牧野組合員



防火帯 (写真左手の林の前に堀を作り防火帯としている)

野焼きの手順は、8月下旬から9月上旬にワチギリと呼ばれる防火帯を刈り込む作業が行われ、ワチギリ後、刈り取った草が乾いた頃に刈り取った草を焼くワチヤキを行い防火帯（堀を掘った防火帯もある）が完成する。この作業により、野焼きによる延焼を防ぐことができる。

翌年の3月上旬に草原に牧野組合員が火入れを行う。火入れは早朝から行われる。高い場所もしくは風上側から行い、逐次下がりながら火がつけられ、火がつけられると風にあおられ炎は数mの高さに達し、牧野組合・地元の消防団員・ボランティアの人々が火の番にあたり延焼を防ぐ。あらかじめ決められた消火地点まで燃やすと消火作業が行われる。消火は重要な作業であり、檜や杉の枝を材料とした「火消棒」「火打ち棒」などを用いて参加者全員で消火するが、近年ではジェットシューターなども使われている。野焼き後の草原は、一面黒一色に姿を変え、4月になると草原に牧草の新芽が生え、5月頃から11月頃まで放牧や採草を行い3月になるとまた野焼きを行う。この繰り返しが草原景観を維



野焼きに参加する、牧野組合員・地元消防団員等の集合の様子



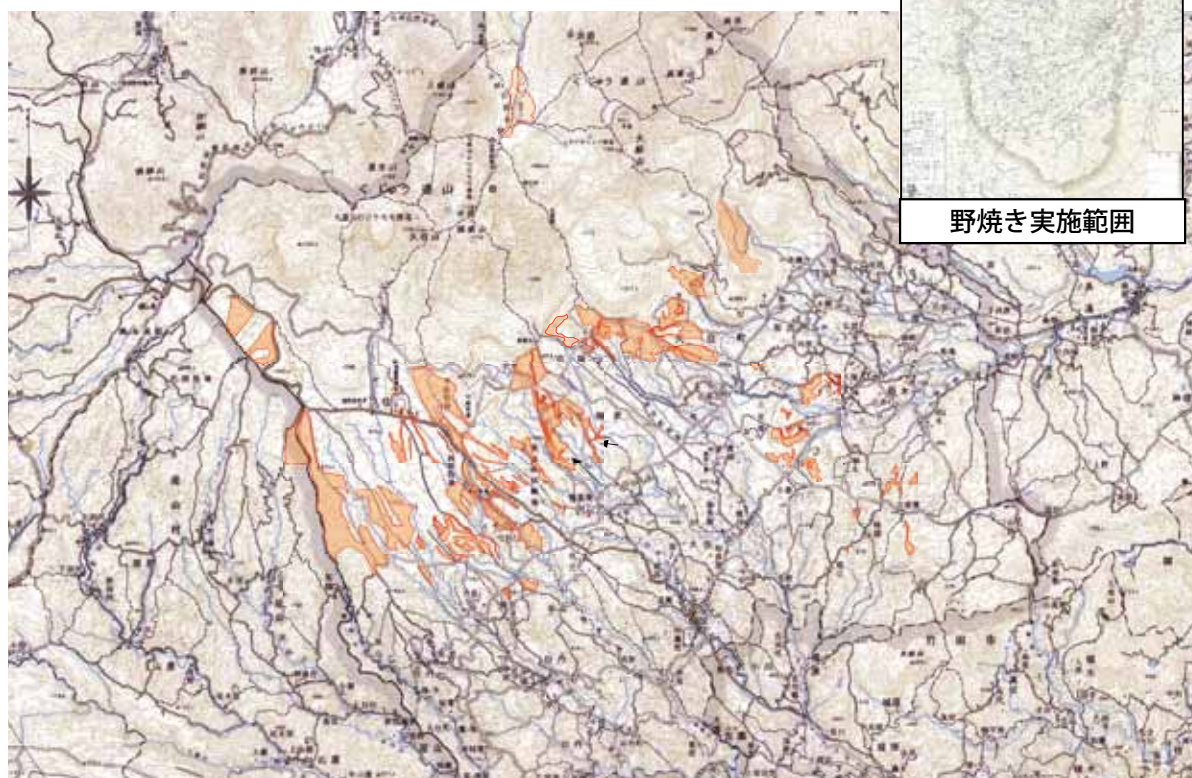
火入れの様子



久住高原の野焼き

持してきたのである。

久住高原は古来より牛馬の飼育が行われてきた場所であり、牛馬の飼育に必要な草地の確保のため野焼きが行われてきた。現在見ることができる広大な草地は長い年月をかけ、高原に住む人々の営みと久住高原の大自然の共生により造られたものであり、これらの草地は現在も放牧や採草地として使用されているだけでなく、市を代表する景観として雄大な久住高原を訪れる人々に四季折々の顔を見せてくれる。



野焼き実施範囲

(8) 久住神社の久住夏越祭にみる歴史的風致

久住地域は、豊後と肥後を結ぶ肥後街道、竹田と日田を結ぶ日田往還が交差する交通の要衝であり久住は宿場町として栄え、また江戸時代を通じ肥後藩の代官所が置かれ、久住・小国（熊本県小国地域）地域支配の拠点となった。この久住に鎮座する久住神社の神輿が建宮神社へ御神幸する祭りである久住夏越祭が8月に開催され、周辺地域から多くの見物客が訪れ賑わいを見せる。

久住神社の由緒は大化2年（646）にこの地に夜ごと稲光に似た光が流れるようになり、大空から一片の白旗が降りてきた。白旗の上に白鷺が現れ「この旗は紀州亀山神社のご神霊である……。」とかなり、翌朝そこへ行ってみると丸い石が見つかった。ただちに神殿を建てるべきと話し合い建てられたのが建宮神社である。その後、建宮から白鷺が飛び立って杉小野の柿の木に舞い降りた、これを見た村人は建宮の祭神が御飛びになったと考え、杉小野に御遷座したいのであらうと、推測し御神殿を建立した。これが久住神社であり、建宮神社を元宮、久住神社を新宮とも呼んでいる。天正14年の豊薩戦争で荒廃していたが、肥後藩主加藤清正により再建



久住神社



建宮神社

され、以後久住手長の一円の氏神として崇拝されている。久住神社の社殿は拝殿・申殿・本殿からなり、拝殿は桁行六間、梁行二間、入母屋造の大型拝殿、申殿は正面三間、側面三間、入母屋造、本殿は三間社流造、銅板葺である。久住神社のこの地への創建が寛文6年（1666）であることからこの時期の建立と考えられる。建宮神社については明治時代以前の建立と考えられる。社殿は拝殿・本殿からなり、拝殿は桁行五間、梁行二間、入母屋造、本殿は三間社流造、銅板葺である。

久住夏越祭は、古来から農作物を風や台風の被害から守るための祭りである



久住夏越祭りの神輿御神幸

「風除け祭り」であったとされ、元禄 13 年（1699）に御神幸が行われた事が始まりとされるが、「後年記」（文久元年：1860）に久住夏越祭の賑わいについての記述があることから少なくとも江戸時代後期には祭りが開催されていたことがわかる。

江戸時代の久住地域は、肥後藩の地方支配組織である久住手永（竹田市久住地域・阿蘇市波野・阿蘇郡産山村）に所属し、手長支配の中心になる手長会所が久住に置かれていた。手長会所の長官は惣庄屋が努めた。久住夏越祭は久住会夜が一切を差配し、久住手永の各町村の庄屋はもれなく参列することが決められており、肥後藩による庇護を受けてきた。夏越祭で巡行される「本山車」も肥後藩主細川公が、祭りを賑やかにするために、始めさせたのが始まりとされている。

久住夏越祭は前夜祭と 2 日間の祭典で行われていたが、近年は前夜祭と 1 日の祭典に短縮している。本山車については事前に神社総代から作成要請を受け決定する。前夜祭では町（新町・田向町・本町・下町）の氏子が子供山車を造り、子供たちが車を引き、笛や太鼓などでお囃子を鳴らしながら町内を巡行する。夜半に 4 町の氏が集まり鐘や太鼓を鳴らしながら町内を廻る「夜渡太鼓」を行う。「夜渡太鼓」では、山車の巡行ルートを通り最後に久住神社社殿の周りを 2 周し社殿を参拝する。翌朝、4 町の氏



子ども山車の巡行



夜渡太鼓

子（新町・田向町・本町・下町）が「本山車」造りを始める。この山車の特徴は、各町がそれぞれ演題を決め、背景を各家庭の日用品や自然の草花等を材料とした見立て細工で山車の飾り、人を人形に見立てた生人形を乗せる。演題は、偉人や英雄や物語の主人公であったり、世相を反映した」演題であったりする。山車は夕刻までに山車を造り上げる。

久住神社では総代、各町の役員、獅子舞楽員等が参列し、神事が行われる。神事では、祝詞・総代や役員による玉串奉奠・建宮獅子舞のお祓いが厳かに執り行われる。神事後、杉小野



本山車作成の様子

地区の氏子により、神の出現を乞うて舞う幣神楽（ヒーカグラ）、建宮地区の氏子による建宮獅子舞の御起舞、神輿の御発ちが行われる。御発ちは、神面をつけた2体の御先荒神と建宮獅子舞が神輿を先導し、獅子舞が各家に舞込を行いながら各町を廻り建宮神社へ御神幸を行う。本来は、建宮神社で納めを行い神輿が一泊していたが、現在は、その日の午後に建宮神社を神輿が発ち町内を御神幸し久住神社へ帰る。

日没後、花火の合図で、本山車4台による曳山車行事（市指定無形民俗文化財）が行われる。本山車が巡行する道筋の両側には祭り提灯の灯りと多くの露店が立ち並び、久住町内外から多くの見物客が訪れ賑わいを見せる中、山囃子の笛・太鼓・鐘の調子に合わせて「ヤーマヤレ、元気出させ」の掛け声に合いの手を入れながら、賑やかにゆっくりと町内を練り歩く。祭典が2日間行われていた頃は、2日目に前日作った山車の台だけ残し作り替えた俄山車を2日目の夜披露していた。翌朝、本山車は土台を残し解体される。

久住地域は、江戸時代の肥後藩の久住手永と呼ばれた地域の中心地であり、豊後と肥後を繋ぐ宿場町として栄えてきた。久住夏越祭は、農村地域の「風除け祭り」であるが、農業を営む人々の平穏無事を祈念することは、商業を営む人々の平穏無事に繋がることから、農商一致した祭りとして、継承されてきた久住町を代表する祭りである。江戸時代から神輿神幸や曳山行事には周辺の農業地域から多くの見物客の訪れ、商業地域に住む人々が曳く山車の「ヤーマヤレ、元気出せ」の掛け声と山車囃子の音色が、高原の町久住に夏の訪れをつげる風物詩となっている。



神事(総代・各町役員)



神事(建宮獅子舞楽員)



幣神楽



建宮獅子舞御起舞



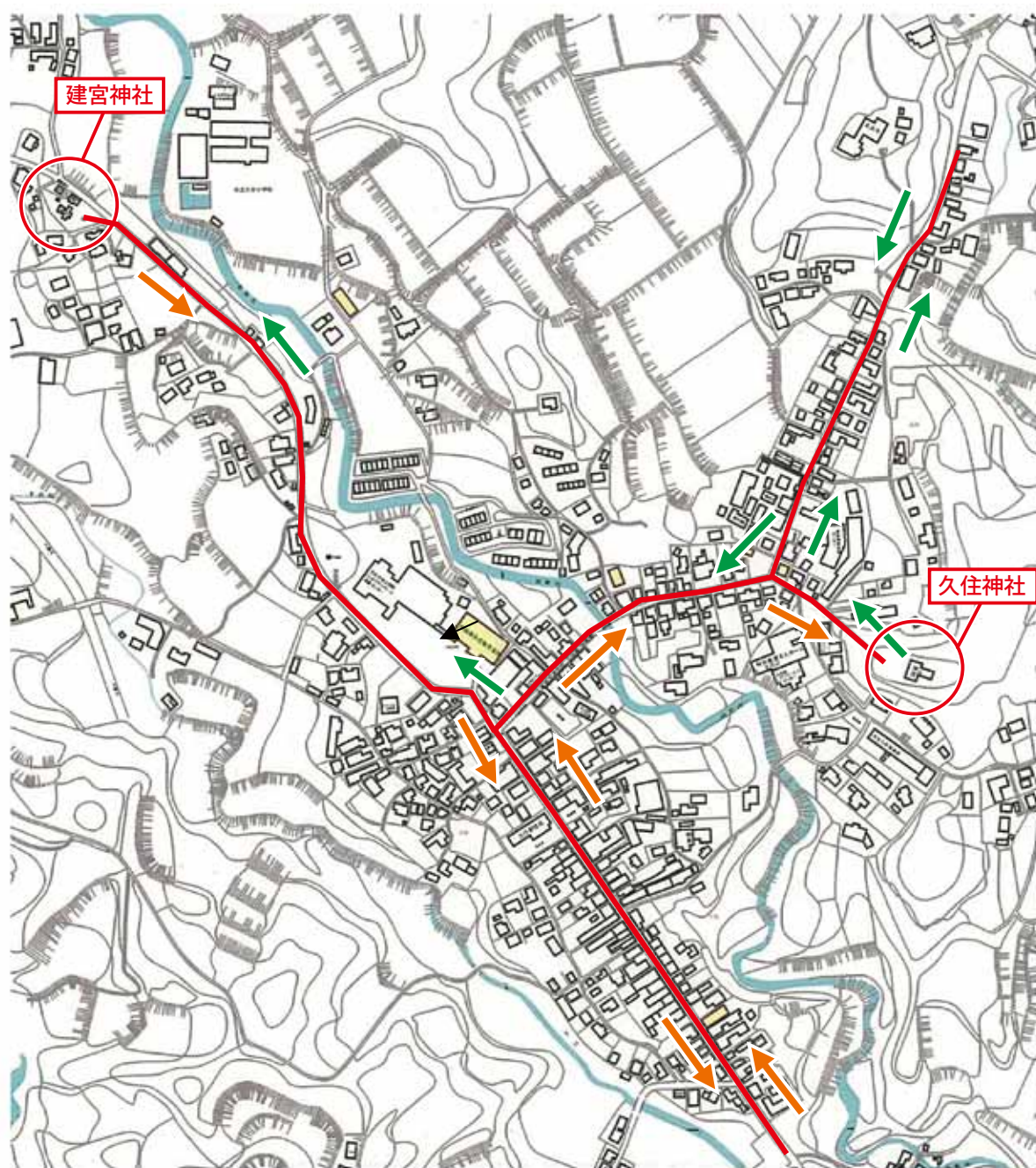
神輿御発ち



本山車巡行(曳山行事)

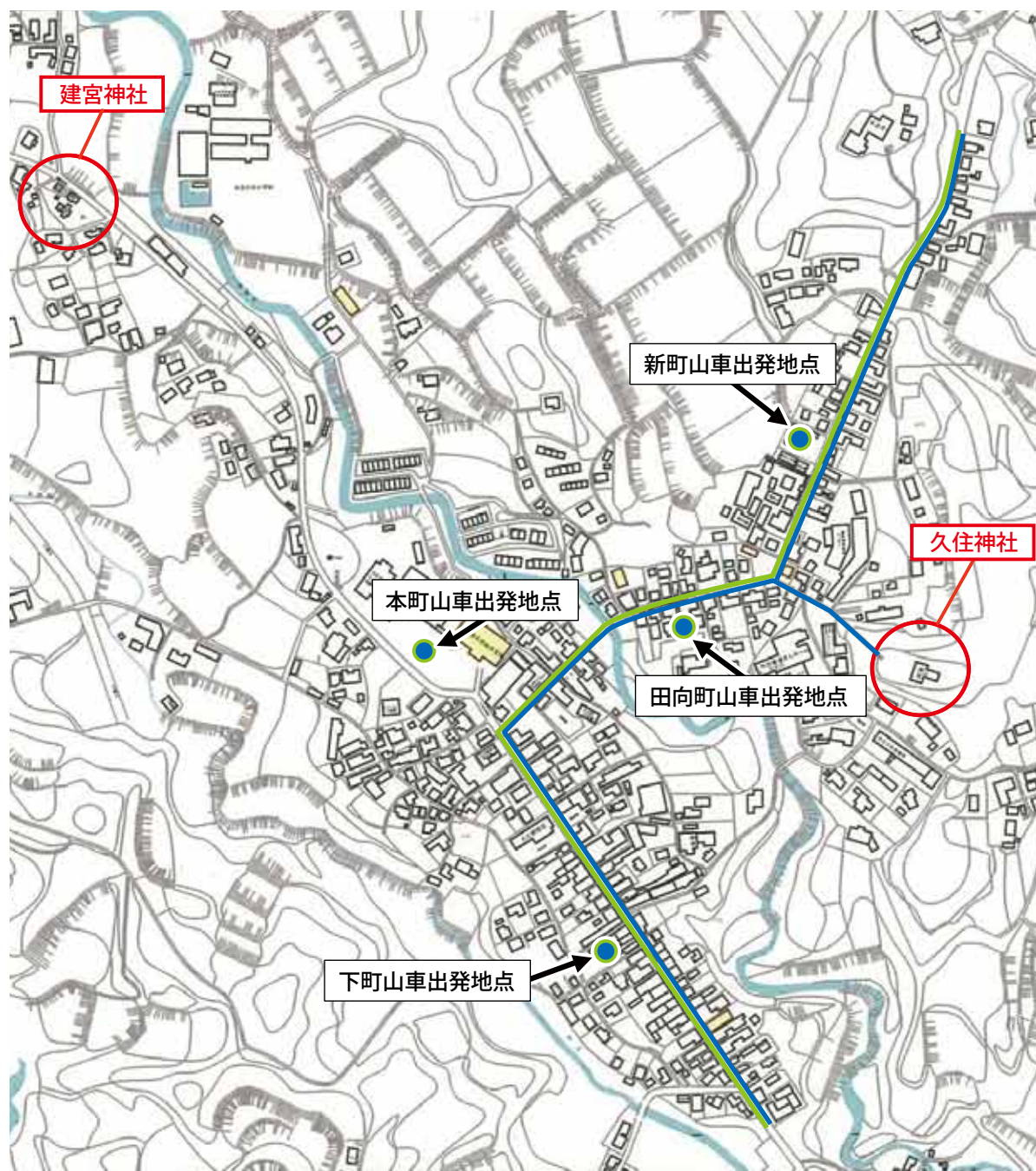


神輿御神幸



← 久住神社→建宮神社
 ← 建宮神社→久住神社

久住夏越祭御神幸ルート図



- 山車巡行ルート(各町を出発しルート内を廻る)
- 夜渡太鼓巡行ルート(各町を出発し久住神社まで巡行)

久住夏越祭関連位置図

(9) 宮処野神社の神保会行事にみる歴史的風致

宮処野神社の神保会行事が行われる宮処野神社は竹田市北部の竹田市久住町有氏に位置する。この地域は、大船山麓に広がる高原地帯で、古代から朽網郷の中心地として栄えた。江戸時代には七里田温泉に藩の御茶屋が建設され、3代藩主中川久清は大船山に登り軍事訓練を行い、その墓所も大船山の中腹に造られている。都野地区に鎮座する宮処野神社は景行天皇と嵯峨天皇を祀る神社で、10月に神保会行事（県選択無形民俗文化財）が行われる。



田園風景広がる宮処野神社周辺

神保会行事が行われる宮処野神社は、景行天皇の行宮跡に天皇をお祀りしたことに始まると伝えられている。その後、平安時代に直入擬大領の女が嵯峨天皇の采女となり、上皇崩御の後、故郷来田見に帰り剃髪し尼となり、恩賜の品を埋めて日夜ご供養をした。この様子を兄が見て哀れみ景行宮の傍らに嵯峨の宮を造営し「嵯峨宮様」と呼ばれ永くこの地方の人々に崇敬され、明治時代になって宮処野神社と改称された。社殿は楼門・拝殿・本殿からなり、楼門は三間一戸の入母屋造、拝殿は桁行三間、梁行三間、入母屋造銅板葺、本殿は三間社流造、銅板葺である。建立年代については明治期以前の建立であると考えられる。



宮処野神社拝殿

宮処野神社の秋季大祭である神保会は、「豊後国志（享和3年完成：1803）」の嵯峨明神祠の記述に「建久以来、大友氏世奉祭す。毎歳十月に神馬一疋を供え、朽網氏をして其の事を掌らしむ。名づけて神保会と日う。」とあり、これが今日の神保会行事の基となった。今日の神保会行事は3基の御輿と3組の獅子組、2組の白熊組で構成される神幸行列が中心の祭礼であり、豊後国志に記述される神保会から変化した祭礼となっている。「弘治三年十月吉日」（1557）の墨書銘のある獅子舞が宮処野神社社殿内から発見されたと大分県無形民俗資料選擇申請書に記されていることから室町時代末期にすでに獅子舞が行われていたと考えられる。また、現在の神幸行列を構成する仏原獅子舞が安政4年（1857）、下河原獅子舞が安政3年（1856）、有氏組白熊が文政12年（1829）に



引治三年の銘のある獅子頭



仏原獅子舞伝書
(安政4年)

舞の伝授を受けた伝書が残されており、室町時代末から江戸時代末には、今日の形に近い神保会行事が成立していたと言える。神保会は求婚の場でもあったことから別名「かたげ市」の名でも親しまれ、参道には祭礼市がたって賑わい、神社付近の集落を「市」と呼んでいることから古くから祭の賑わいがあったことがわかる。

神保会行事は、神社総代が参列し神殿にて神事が行われる。神事では、神職による祝詞があり、総代長から順に玉串奉奠を行い、その後神輿へ神を遷座する祝詞が行われる。神事終了後、各獅子舞により、祭が始まることを告げる音入れ（舞調子）が行われ、神輿を担ぐ氏子・神楽・獅子舞・白熊の楽員が片膝を立て参列し本宮神殿横において神職によるお祓いの神事が行われる。お祓いの神事では、神職が五色紙と米を氏子らの頭上に振りかける。すべての神事終了後、神楽の奉納・獅子舞と白熊の起しが行われ、神輿が御発ちする。神輿の御神幸は神幸行列を組み行われる。神幸行列は猿田彦を先導に獅子舞3組（仏原獅子舞・下河原獅子舞・桑畑獅子舞）、白熊（有氏白熊・吉野流白熊）2組、花笠、御輿3基（市・石田・柚柑子の氏子が担ぐ）の順で隊



お祓いの神事



神幸行列の様子

列を組み、本宮から下宮まで、のどかな田園風景が広がる御神幸ルートを神輿が御下りを行う。下宮に到着後、獅子舞・白熊の納め後に神事・神楽の奉納が行われる。本来は下宮で1泊し、翌日本宮へ御帰りを行っていたが、現在はその日の内に本宮への御帰りをを行う。御帰りでは、途中にある鳥居で獅子舞の鳥居舞と白熊の鳥居越しが行われるほか、神楽・獅子舞・白熊によ



仏原獅子舞



下河原獅子舞



桑畑獅子舞



有氏組白熊



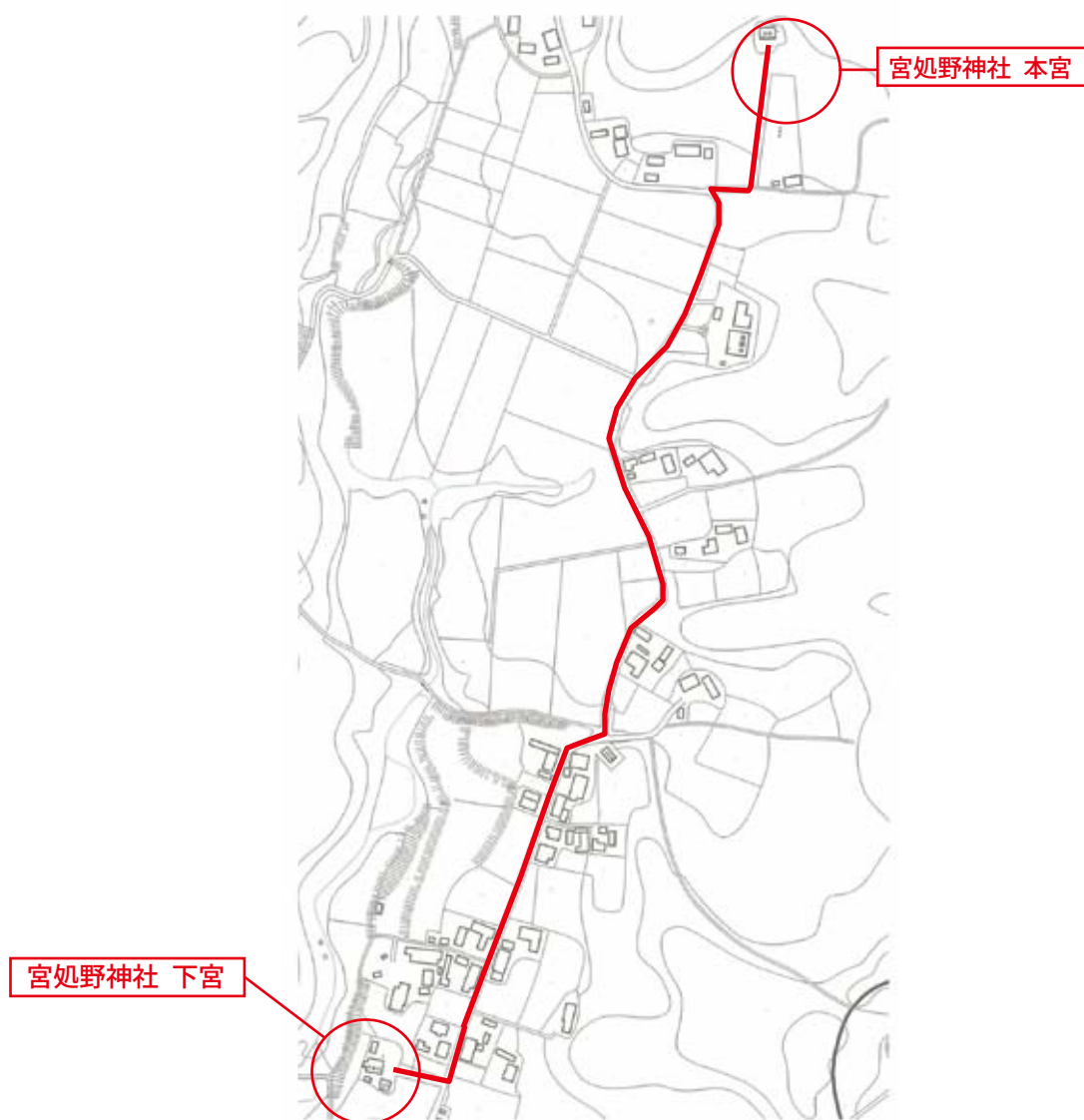
宮処野神社吉野流白熊



宮処野神社神楽

る各地域への舞込みが行われる。神輿の本宮到着の時刻になると、本宮参道には、かつては祭礼市が立ち、蜜柑・焼魚・素麺の店や芝居・見世物等が出て大変な賑わいをみせていた。現在でも参道には多くの露店が立ち並び、氏子や周辺地域の人々が数多く参拝に訪れ賑わいを見せる。本宮にて神楽の奉納や獅子舞・白熊の納めが行われた後、神事を行い祭が終わる。

宮処野神社周辺は、日頃のはのどかな田園風景が広がるが、祭当日は、氏子により奉納された大幟が沿道に建ち、社殿周辺や参道に多くの参拝者が立ち並ぶ。また、神楽や獅子舞の調子や白熊の唄声による賑わいの中を華やかな御神幸行列が整然とした姿で進んで行く。それは、中世期に「朽網」と呼ばれていた頃の繁栄の様子を今でも物語っている。



宮処野神社神保会行事 神輿巡幸ルート

(10) 長湯温泉の温泉供養にみる歴史的風致

「温泉供養」の行われる湯原天満社・湯原薬師堂は竹田市直入町長湯に所在する。長湯地域は、古くから温泉地と知られており、「豊後風土記」にも記されている。室町時代には朽網郷の領主である朽網氏の管理下に置かれていたことが文献に記されている。江戸時代になると岡藩により湯屋や御茶屋が建設され、長湯温泉は湯治場として整備され、岡藩歴代藩主や幕府からの巡見使も湯治に訪れるほか、藩士の湯治も認めており、藩営保養所とも言える二の宿、三の宿も建てられていた。現在の長湯温泉は、温泉旅館・

共同浴場・公営浴場が立ち並び、温泉街を流れる芹川へ流れ込む温泉のお湯と鍾乳石のように堆積した湯とじ（湯あか）が奥豊後の小さな温泉町長湯の情緒を醸し出してる。長湯温泉町を長湯温泉（湯原温泉）にある湯原薬師堂に温泉の守護神である薬師如来と地蔵菩薩が安置されている。湯原天満社・湯原



芹川沿いに温泉旅館が並ぶ長湯温泉

薬師堂では温泉による諸病退散を祈願した温泉供養が行われる。

湯原天満社は明治17年（1887）に、周辺の5社を合祀し創建された。その後、社殿が腐朽したため、大正9年（1920）に岡藩の御茶屋跡である現在地に新築された。社殿は拝殿と神殿からなり、拝殿は2間3間の木造入母屋造瓦葺、神殿は1間2間の木造社流造の建物である。



湯原天満社拝殿

湯原薬師堂は湯原天満社の境内の片隅にある薬師堂。岡藩六代藩主中川久通に見初められ京都よりこの地に移り住んだ陽光院が胃腸病を患い苦しんでいたところ、薬師如来と地蔵菩薩が現れ湯ノ原の温泉で治療すれば治ると告げられ全快したことから、薬師如来と地蔵菩薩（市指定有形文化財）を祀ったことが由来される。現在の薬師堂は昭和11年に建て替えられたもので、桁行梁行ともに一間、入母屋造、木造瓦葺の建物である。



湯原薬師堂

温泉供養は、温泉による諸病退散等を祈願するために毎年4月と8月に行われる。その起源は、直入町史によると薬師如来像・地像菩薩像の開眼供養が行われた正徳元年（1711）8月に求めることができる。



湯原薬師堂の薬師如来と地蔵菩薩

この温泉供養にあたり、薬師如来像と地藏菩薩の「湯あみ」行事が行われてきた、温泉の守護神である二尊を清めるために湯浴みさせる行事で、二尊の湯浴み後に入浴すると一段と効能があると言われる。また、二尊に奉納された温泉の湯を飲むと特に温泉の効能があるとされ、祭当日は温泉を汲んで飲む人が後を絶たない。近年は二尊が砂岩質の石像で傷みが出てきたため「湯あみ」については中止しており温泉の湯を奉納し法要が行われている。

温泉供養では、長湯温泉の各温泉が温泉の湯を一升瓶に酌み、湯原薬師堂に奉納を行う。湯原薬師堂では地域住民や温泉関係者が参列し、温浄寺の住職による法要が行われる。同時に湯原天満社においても神事が行われる。神事が終わると神輿が天満社を発ち、薬師堂へ参拝を行い、湯原橋を渡り温泉旅館や商店が立ち並ぶ長湯温泉街を巡幸する。湯原薬師堂での法要が終わると供えられた温泉水は各温泉へ持ち帰られ、それぞれの温泉へ戻される。湯原天満社では神楽が奉納され、長湯温泉の湯治客や地元民が見物に訪れる賑わいを見せる。

歴代岡藩主や藩士の湯治場として利用されてきた長湯温泉は、山々に囲まれ芹川沿いに温泉旅館が立ち並ぶ情緒豊かな温泉郷である。湯原薬師堂の二尊を供養する温泉供養では、各温泉が温泉の湯を湯原薬師堂に供え、長湯温泉の発展とそこで生活をする住民が温泉へ感謝する行事として法要を行う。温泉街では神輿が賑やかに巡行し、住民や湯治客が沿道で囃し立てる様子は、湯治場長湯を象徴する歴史的風致として今もあり続けている。



湯原薬師堂に温泉を供える



湯原薬師堂での法要



湯原薬師堂での神事



神輿巡行の様子



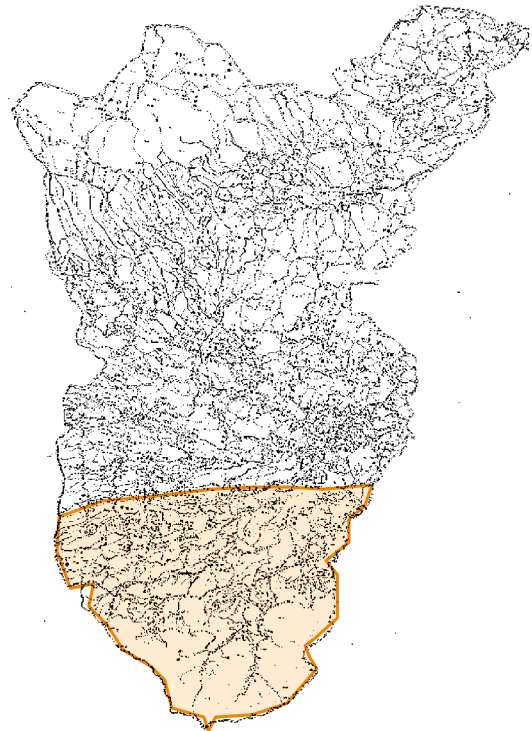
湯原天満社での神楽奉納



温泉供養神輿巡幸ルート

(11) 農業水利施設の維持にみる歴史的風致

竹田市南部地区（入田・姫岳・宮砥・柏原地区）は、
祖母山系の山々が作り出す険しい山地と大野川水系の河川浸食により谷部が形成され、山地、山麓緩斜面、谷部、谷底平野の連続による地形を呈する。祖母山系の山地を河川が浸食し形成された多くの溪谷、大野川の源流をなす湧水が各所に見られ、特別天然記念物カモシカ、県指定天然記念物イワメ、市指定天然記念物神原のトチなど数多くの希少生植物が生息する自然豊かな地域でもある。また、竹田市南部地区は水利条件の悪い狭小な谷底平野と山麓緩斜面を利用した棚田による農地が点在し、江戸時代後期以降それらの農地に莫大な労力を投じて農業水利施設の整備が行われてきた。それらの農業水利施設は現在まで地域住民により維持管理が行われ、かわらず多くの水田へ農業用水を供給している。また、谷筋に展開する農村地帯では豊作を祈願する祭が各所で行われ、祭に奉納される神楽・獅子舞・白熊が数多く伝承されているなど、棚田や井路等の農村風景と豊作を祈願する民俗芸能がこの地域の景観を作り出している。



南部地区の位置



南部地区の棚田

大野川の源流地帯である竹田市域は、支流の小河川がほぼ西から東に向かって流れ、古くから流域の人々の生活に利用されてきた。しかし、急峻な地形を呈するこの地域の河川は川底が深く落ち込み、水の利用は予想外に難しく、古くから水路を設けて導水する井手灌漑や水を貯めて利用する溜池灌漑が行われてきた。古い時代の水田は、谷間や谷の出口で湧水が豊富な場所で行われ、水利は谷川の水を小さな堰でせき止めて流し込む方法がとられていたが、水田の開発が進むと、遠くの水源から水路で水を導く方法に変わり、大規模な井堰工事が進められた。江戸時代の初期、岡藩3代藩主中川久清が岡山から熊沢蕃山を招き、その指導で灌漑水利事業が進んだとされる。蕃山の指導で行われた水利事業には、緒方井路と城原井路が知られている。このように竹田地域には江戸時代から数多くの農業水利施設が整備され、特に標高差のある山間地に開かれた水路の開発は、山地の傾斜地に階段状の水田である「棚田」が開かれるように

なった。このような水路は市内全域に見ることができ、音無井路、富士緒井路、明正井路、神原井路などがある市の南部と城原井路、明治岡本井路などがある北部の山間地域において数多く残されている。

音無井路は、竹田市の南部宮砥地区に所在し、大野川の上流大谷川から取水する井路で、元禄 6 年（1693）に岡藩士須賀勘助が音無井路を開削すれば有益であることを藩主に上陳し許可を得て開削に着手し、大方の完成を見たが洪水の為に施設が大破し復旧のめどが立たず、勘助は割腹したと伝えられる。その後、寛保 3 年（1744）、文化年間（1804～1818）、天保 7 年（1836）、文久 2 年（1862）に復旧の計画が立てられたが、資金面等の問題から実現されなかった。明治期に再び井路復旧の協議が行われ、明治 14 年（1881）年に大分県から建設の許可を受け、明治 17 年（1884）に工事着手し、明治 29 年（1896）に幹線及び 3 支線が竣工した。その後、水不足解消のため大谷ダム（1930 年着工～1945 竣工）を建設し、幹線からの用水の 3 つの支線に適切に配分するため、直径 6.42m の円形の分水である 12 号分水（円形分水）が昭和 9 年（1934）に造られた。12 号分水は、頭首工から約 2100m 続く暗渠を抜けた位置に作られている。建設当初は石積み構造であったが、昭和 59 年にコンクリート製に改修された。形状は直径 6.4m 円形を呈した升状の分水施設で、円形の升の壁面に 20 か所の窓が開けられ、窓の数を調節することで面積に応じ水を均等に分ける施設である。12 号分水の名前の由来は建設当初に窓が 12 口あることからつけられたともいわれる。音無井路は総延長 17km、受益面積 90ha を有する。昭和 51 年には井路開削の苦労を後世に伝える音無井路記念碑が井路の傍らに建立された。



音無井路頭首工



音無井路 12 号分水



音無井路暗渠入口



音無井路記念碑

また、明正井路は大正13年に竣工した竹田市入田地区の緒方川から取水し、豊後大野市まで続く、総延長175kmに及ぶ長大な灌漑用井路である、トンネルと橋による導水部分が多く、大小17基の水路橋が建設され、石造アーチ水路橋が14基現存している。最も規模が大きい明正井路第一拱石橋は、大正8年(1919)に完成した、橋長約78mの6連のアーチを有する水路橋である。



明正井路第一拱石橋

富士緒井路は、大正13年に竣工した、竹田市と豊後大野市を受益地に持つ総延長15kmの幹線水路を持つ水路。昭和13年に水量確保のため竣工された白水溜池堰堤施設は、越流式コンクリート重力ダムで構造物を地形に対応して的確に構築したことにより類い



白水溜池堰堤水利施設

稀な流水美を現出させており、技術上かつ造形上の価値が認められ、平成11年に重要文化財に指定されている。これらの施設は南部地区における代表的な農業水利施設であり、現役の農業施設であるのみでなく観光資源として多くの観光客が訪れている。

農業用水利施設の多くは江戸時代から昭和初期に建設されたものが多く、建設当初から、受益者である地域の住民の手により維持管理が行われてきた。水路の受益者は資金面や維持管理を行う水利組合(土地改良区)等をつくり総会などを通じて年間の活動を決定し維持管理活動を行っており、音無井路でも明治26年に音無井路普通水利組合が設置され、井路の管理運営を行ってきた。平成14年には、音無井路普通水利組合を含む竹田市内の14の改良区(水利組合)が合併し竹田市土地改良区として施設の維持管理が適切に行えるよう組織運営基盤を強化し現在維持管理を行っている。

井路の維持管理に関する年間活動計画等は、3月の総会や理事会で決定され、各組合員に周



組合員による音無井路幹線の清掃作業の様子(井手さらえ)



支線の清掃作業の様子

知される。音無井路土地改良区所有の文書類によると、主要幹線の維持管理活動は、組合員総出による「井手さらえ」と呼ばれる水路内の砂礫の除去を春に、除草作業等を7月頃に実施し円滑な用水の供給を行うほか、ごみ等の除去は用排水係8名により常時行われている。支線の維持は支線の受益者が常時行っている。

また、音無井路では、毎年春の清掃時に12号分水の傍らにある水恩碑の前で水恩祭を実施している水恩祭では土地改良区の役員が集まり神事が行われる。神事は神職による祝詞が行われ、土地改良区の役員による玉串奉奠を行う。その後、神職が12号分水に向かいお祓いが行われる。水恩祭は井路竣工当初から続けられ、水路暗渠の掘削は途方もない難工事であり、起伏の激しい当地域の田畑に用水を流すことは古くから農民の悲願であり、その悲願達成のために失われた尊い命がある。水恩祭は、水に対する畏敬の念と先人の流した血涙に対する感謝の気持ちを表現したものである。



音無井路水恩祭の様子

竹田市南部地区では、先人達により開かれた棚田や音無井路をはじめとする農業用水利施設が今もなお使用されている。そこでは、毎年、水路により恩恵を受ける住民たちによる水路清掃や水恩祭が丁寧に行われている。祖母山麓の起伏の激しい谷部の斜面に広がる棚田と山あいには点在する集落という、竹田市の農村の原風景が造り出されている。



音無井路水恩碑

